



心の歌を奏で て

理想の国 ①

芳田尚哉

遠くからでもよく見えたその巨大な黒い扉は、近付いてくるにつれてますます大きくなっていく。当たり前だ。

それにしても、この巨大さは異常だ。

崖の上まで何メートルあるのかわからないが、ビルでいえば……五階くらい？ いや、もっとか。こんな場所にいると、大きさの感覚がよくわからなくなってくる。とにかく、とてつもない大きさだ。

「大きいね……」

「ああ」

もう、他に言葉は出てこない。それ以外の言葉は必要ない。

そんな扉も、いよいよ遮るものなく見えてきた。

「ねえ、あれ」

「ん？」

先を行くキヨカが見つけたのは、小さな小屋だった。

扉の少し手前に建っているその小屋は、小さなログハウスのようにだけど、こんな場所に建ってるって事は……。

「見張り小屋かな？」

「……そうだろうな」

こんな場所に住んでいるとは思えない。目的もなく、建てる事もないだろう。

だとすると、容易に結論に至る。他の可能性はかなり低い。

「とにかく、そうだとしたら誰かがいるはずだ」

いきなり襲ってきたりはしないだろう。もし、山賊かなにかだったら……。いやいや、これだけの扉をわざわざ山賊が作るとは思えない。もっとも、この場所を制圧して、占拠しているなら話は別だが。

「そうだよ。きっと、検問かなにかだよ」

「それもどうかと思うけどな」

もちろん、物騒な事がないに越した事はない。平穏な旅をしたいだけだ。

だけど、ここを通らないわけにもいかないみたいだしな……。

安全が保障されてないって、こんなに不安なんだな。

「よし、任せたよ、トールちゃん」

と、キヨカが俺の後ろに移動して、背中を押してくる。

「お、おい。なんだよ……」

「やっぱり、こういうのって、男の子が前だよ。か弱い女の子を、しっかりと守らないといけないんだよ」

「こういう時ばっか、お前な……」

「ほら、ぐだぐだ文句を言わないの。ちょっと見てきてよ」

「ったく……」

ぐいぐいと背中を押されて、引き返す事はできない。

まあ、しょうがない。

ここで立ち止まってもしょうがない。

もしかしたら、あそこで風呂かせめてシャワーでも借りれるかもしれないし。あわよくば、なにか食べ物も。

淡い期待かもしれないけど、そういう期待がないと足が進まない。

「キヨカ、押すなっの」

「なにそれ。もっと押せって事？」

「んなわけあるか」

なんだか、そういうコトをテレビで見た事がある気がするけど、今そういう事をするはずがないだろう。

「とにかく、行ってみるから」

重い荷物はキヨカに預かってもらって、風伯(ふうはく)だけを持って小屋に向かう。

もし襲われたら……。そう考えると、どうしても風伯を抜く準備をしてしまう。

「なにもなしで頼むぜ……」

恐る恐る小屋に近付いていく。中の様子を窺おうにも、外からではよくわからない。小さな窓はあるのだが、そこから中は見えないようになっている。

外にはなにもない。何人くらいいるのかもわからない。

ただわかったのは、小屋は崖の中にも続いているようだ。小屋の後ろが崖と一体になっている。

すごい建物だよな……。

小さな小屋かと思いきや、奥にも続いてるなんて……。

って、今は感心してる場合じゃない。

とにかく、確認しよう。

まあ、ここに寄らないといけないわけでもないんだろうけど、ここを素通りしてあの扉に行けるとは思えない。

「よ、よし」

深呼吸をして、心を決める。

そして、風伯でノックする。

「……………」

びょうっという谷を吹き抜ける風が不気味な音を立てる。

「はい、どなたでしょう」

男の声だ。緊張が走る。だけど、敵対する様子はない。

「すみません。旅をしている者なんです……」

怯えながら返答する。

すると扉が開き、中から髭を蓄えた大柄な男が出てきた。

「うわっ」

マジで山賊か。

そう思って距離をとる。

「警戒されんでもいいですよ」

男は、自分が安全だと示すように両手を挙げる。

穏やかな声で言ってくれるが、その見た目でどうしてもひきつってしまう。

「どうかしたの？ お客様？」

その後ろから、この人とは対照的で、ほっそりとした女性が顔を覗かせる。

「ああ、どうやら旅人のようだ」

「あら、そう。じゃあ、入ってもらいましょう」

「ああ。さあ、どうぞ中に」

「は、はあ……」

どうやら歓迎されている……のか？ すんなりと中に入れてくれるようだ。

「あの…連れもいるんですけど……」

「ああ、そうですか。ご一緒にどうぞ」

「はい」

手招きしてキヨカを呼び寄せる。

不安そうな顔をしながらも、こっちへやって来ようとするのだが……。

「そっか、荷物か」

自分の荷物だけでも大変なのに、俺の荷物もキヨカに預けてたんだった。慌てて取りに行く。

「もう、私一人じゃ無理だよ」

「すまんすまん」

案の定、キヨカは少しご立腹だった。

「ねえ、大丈夫そうなの？」

「あ、ああ。なんだか怖くはなさそうだ」

「どうだろうね……。トールちゃんは、見た目とか雰囲気ですげえ騙されそうだし」

そう言われて言葉に詰まる。確かに、見た目ですげえ判断するさ。でも、そういうもんだろ。なんの情報もなければ、見た目ですげえ判断するしかないんだから。

「でも、いざとなったらアーちゃんに助けてもらうからいや」

「……………」

俺の信用はないわけね。まあ、俺だって蜘蛛(アラネーオ)を頼りにしてるけどな。

「とにかく、この場所について聞こうぜ」

「そうだね」

小屋の中は、思ったよりも広かった。やっぱり奥に部屋が続いているようだ。

「ようこそ。お疲れでしょう」

俺たちは、中に入ってすぐの部屋にあるテーブルに案内された。

「どうぞ」

そうすすめられて、俺たちはそれぞれ席に着く。

「どうぞ、くつろいで下さい」

そう言うと、男の方は俺の前に座り、女性の方は奥の部屋に入っていった。

しかし、なかなかくつろげない。知らない世界に緊張もあるが、なにより目の前の男の風貌がそうさせてくれない。

左隣を見ると、さしものキヨカも緊張していた。

俺たちが所在なさげにしていると、男が口を開いた。

「あなた方は、どこから来られたんですか？」

「「……………」」

その質問に、びくりと体が強ばる。

「え、えっと……」

どう答えればいいんだ？ キヨカになんとかしてもらおうとして隣を見ると、キヨカもこっちを見ていた。

ああ、やっぱりですか。俺がなんとかしないといけないのね。

わかっていたさ。わかっていたけど、どっちかという、こういうのはキヨカの方が得意だと思う。

しょうがない。

「えっと……俺たちは、ずっと遠くの方から……」

本当にこれでいいのか？ 男の表情を見ながら、恐る恐る口にする。

男は黙って、俺の方をじっと見ている。そして時折、キヨカの方も見る。

見られたキヨカは、緊張しているのか、背筋が伸びていて面白い。俺も似たような状態だろうけど。

「そうですか。いやいや、実はですね、少し前にも、あなた方のような旅人が来られたんです。もう、出発されましたが。どうも、その方々に、あなたたちが似ていたもので……。もしよろしければ、どういう国から来られたのか、教えていただきたいかったですよ」

「あの……その人たちは？」

俺たちみたいな旅人が他にいるのか？

もしかして、ヒナゲシさんとリュウドウさんかと思ったが、見た感じは違うだろう。

もっと俺たちのような感じの旅人がいたという事になる。

「それが、詳しくは教えていただけなかったんです。もし、同じ国からでしたら、教えていただこうかと。まあ、これは個人的な興味ですが」

「は、はあ……」

その人たちが、俺たちと同じとは限らないが、俺たちに関していえば、詳しく教えられるものじゃない。別に隠す必要はないだろうけど、説明するのが難しい。

きっと、ここは俺が知っている世界じゃない。

確信はないけど、なんとなくの雰囲気わかる。

「ちょっと、訳がありまして……」

「……そうですか。残念です」

男はため息を吐く。

「おっと、さっきの質問は、本当に個人的な興味ですので。別にあなた方が気にされる事ではありませんよ」

「ゴーウオン、旅の方に失礼を言わないの」

そう言いながら、女性がなにか飲み物をトレイに乗せて運んできた。

人数分のグラスには、赤い液体が注がれている。

「なにかな、あれ」

「わからん」

見た感じだと、トマトジュースのようだが、もっとさらっとしている感じだ。

「別に失礼な事は……」

ゴーウオンと呼ばれた男は、ねえと俺たちに同意を求めてくる。

「え、えっと……」

「大丈夫です。ちょっと、雑談をしていただけですから」

と、キヨカが上手くとりなす。

やっぱり、キヨカの方が向いてるよな、こういうのは。

「そうですか。それならいいのですが」

女性は安心した様子で、俺たちの前にグラスを置いて、キヨカの前に座った。

「どうぞ」

そう勧められても、見た事もないものに口を付ける勇気がない。レストランのような場所なら別だったかもしれないが、こういう場所ではどうしても警戒してしまう。

「美味しいですよ」

それを示すかのように、男はぐいっと一気に飲み干す。

「じゃあ……」

それを見て、俺は恐る恐る口を付ける。キヨカは……完全に俺を見ていた。毒味は俺だよな、やっぱ。

えい、どうにでもなれ。

そんな覚悟で一口含む。

「……………」

な、なんだ、これ。

口に入れると、仄かな酸味が口の中に広がる。そしてすぐに、爽やかな甘みが広がっていく。

こんな飲み物、今まで飲んだ事がない。

なんだろう、これは。

なにかの果汁のような気もするが、思いつくものはない。

ミックスジュースかと思ったけど、そういう感じでもない。果汁の他にもなにかが入っている

と思うけど、この味はひとつのものだ。

「トールちゃん？」

じっとグラスを見つめている俺の肩を叩く。それで、ようやく現実に戻る。

「大丈夫？」

「あ、ああ」

「本当にどうしたの？」

心配そうに俺を見る。

「キヨカも飲んでみればわかるって」

そんな言葉に、キヨカは少し不安そうな顔をするが、ゆっくりとグラスに口を付ける。

「……………ふおあっ」

飲んだ瞬間、キヨカは静止した。

しばらくして、キヨカがバシバシと俺を叩いてくる。いや、これはもう殴っているという感じだ。

「痛いっ！ 痛いっての」

それでもキヨカはやめるつもりはないようだ。バシバシ叩いてきやがる。

「やめっ、やめろって」

手を払っても払っても、やめようとはしない。

なんなんだよ、こいつは。

「美味しいよ。なに、これ。美味しすぎる。体に染み渡るよお」

俺を叩きつつ、感嘆しつつ、一気に飲み干しつつ——忙しすぎるだろ。

「わかった。わかったから、やめろっての」

キヨカの手を掴んで、ようやくやめさせる。

「ったく……痛いっての」

やっただよ。痛かった……。

「トールちゃん、これ美味しすぎ」

「わかったって」

また叩かれそうなので、キヨカの手は掴んだままにしておく。

「トールちゃん、手を離してよ」

「叩かないか？」

「……………多分？」

多分だと？

しかも疑問系！

「信用できんわ」

「大丈夫だって。私を信じて」

「……………無理」

信用できるわけがないだろ。なんたってキヨカだぞ。

「トールちゃん、わ・た・し・を・し・ん・じ・て」

「できるか」

そう言いつつも、ずっと掴んでいるわけにもいかない。

「しょうがないか」

キヨカの手を離す。

「もう、これ最高っ」

そう言って、早速再開しやがった。だから信用できないんだっての。

「はあ……」

もう、これは諦めるしかないだろ。

諦めた。

キヨカの好きにさせておこう。そのうち飽きるだろ。

左肩が痛い、完全に無視して謎の美味しい飲み物を飲む。やっぱ旨い。本当にこれってなんだろう？

そんな風にくつろいでいたので、今どこにいるのか忘れていた。

前を見ると……。

穴があったら入りたい。

二人が、こっちを微笑ましい目で見ている。

「おい、キヨカ」

キヨカにも現実を知らせないとな。

「なに？」

んっ、と顎で前を指す。

「ん……………んはっ！」

ポツと一瞬で顔を赤らめ、そして俺をグーで殴る。もう、ぼすぼすと。

「痛い。痛いっての」

加減なしに、ほぼ本気で殴ってくるものだから、マジで痛い。

鍛えてるとか、そういうの関係なしで痛い。

つうか、キヨカだって、多少はじいさんに鍛えられてたわけだからな。普通の女の子よりは、確実に強い。そんな相手に、マジで殴られたら……。

「痛いからやめろ」

そんな俺たちを、二人はますます微笑ましく見ている。

ああ、本当に穴に入りたい。このまま、ここを飛び出したい。

「はははっ、お二人とも、本当に仲がよろしいんですね」

男の人——確か名前は……思い出せないや。ウーなんとかさん？ 違ったっけ？

とにかく、男の人が声を出して笑うと、女性の方もクスクスと声を出して笑う。

それを聞いて、ようやくキヨカは手を止めてくれた。

「はううっ。私、恥ずかしくて死にそう」

それには同感だが、キヨカの場合は自業自得なんだよな。俺は殴られてただけだし。

それを言うと、また続きそうなので、俺の心の中に留めておく。なんだか、こういうのばっかだぞ。

「お二人とも、お代わりはいかがですか？」

あまりの飲みっぷりに、女性の方がそう言ってくれた。

「……お願いします」

恥ずかしさもあって、遠慮するかと思われたが、飲み物の美味しさには勝てなかったらしい。キヨカは怖ず怖ずとグラスを渡す。

「少しお待ち下さいね」

「……はい。ありがとうございます」

恥ずかしさのせいで、緊張や警戒心はなくなったみたいだ。それはそれでいいのだろうが、この場にいる事がつらくなってしまった。

「それにしても、あなた方といい、先程お話ししました旅の方といい、あなた方の国の方々は、皆それほど仲がよろしいのですか？」

笑みを浮かべながら、そんな質問をされた。

ってというか、俺たち以外の人ってのがわからないんだけどな……。

「いや、どうなんでしょうね。自分たちだと、よくわからないってというか、その人たちもなのかもしれないけど、これが普通ってというか……」

適当にお茶を濁しておこう。無難にどうとでもとれるようにしておく。

「そうだね。そうじゃない人もいるかもだけど、私とトールちゃんは、これが普通だよね」

……なんだか、納得できないんだが、ここで否定するわけにもいかないよな。とりあえず頷いておく。

「そうですか。それを普通だと仰られるのであれば、その国は大変幸せなのではないでしょうか。あなた方と似ておられる旅の方も、お二人で様々な場所を旅されてるようでした。もっとも、そのお二人の案内は、エスネが……ここにはおりませんが、エスネという者がいたしまして、少しだけ様子を聞いただけなんですけどね」

案内？

その言葉に引っかかる。

案内をするという事は、あの扉の向こうに入れるって事だよな。だとしたら、この人たちはガイドみたいなものなのか？

「お待たせしました」

それを訊こうとした時、お代わりの飲み物が運ばれてきた。

「ありがとうございます」

キヨカはそれを受け取り、今度はゆっくりと少しずつ飲んでいく。

「美味しい……」

キヨカは満面の笑みを浮かべる。

「本当に美味しそうに飲んでくれるのね」

「だって、本当に美味しいんだもん」

「ありがとうございます」

そういう風になっていると、なんだかキヨカが、子どものように見えてくる。さながら、この女性がお姉さんだろうか。

「さて、本題にうつりましょうか」

席に着くと女性がそう切り出した。

本題？

なんだろう？

それにしても、一気に空気が変わった。ゆったりとしていたものが、急に張り詰める。

「これから、いくつか質問をしますので、率直に答えて下さい」

質問……？

どんな質問だ？

ゴクリと唾を飲み込んで、背筋を伸ばす。

「別に、試験ではありませんし、あなた方に危害を加えるつもりはございません。ただ、我々の国は、外部からの人をあまり受け入れておりません。それといたしますのも、我々の国は、少々特殊な事情がありまして、外部の人を苦手とする者が多いのです」

「そうなんですか。だったら私たちは……」

「おい」

もしかして、このまま遠慮するんじゃないだろうな。

そう思ったので、キヨカの手を遮る。

「キヨカ。俺たちは……」

「そうだけど……」

やっぱり、キヨカはそのつもりだったのか。

「確かに、この人たちにとっちゃ迷惑かもしれないけど、俺たちだってやらなきゃならない事があるだろ。そのために、俺たちは旅をしてるんじゃないか」

「だけど……」

「俺たちは、この国の人たちを傷つけるつもりなんかないだろ」

「当たり前だよ」

「だったら、いいじゃないか。この人たちが、ダメだと言うなら、それに従えばいい。違うか？」

「……………わかった」

「よし」

とにかく、きちんと許可をもらって入らないといけないみたいだな。いくら蟲(ベステート)を封印するからといって、無許可で入るわけにはいかない。きちんと許可が必要なら、そうするまでだ。

「すみません。お待たせしました」

「よろしいでしょうか」

そう言って、女性が話を続ける。

「失礼とは思いますが、あなた方の事を知らなければなりません。これからする質問に、正直にお答え下さい」

「……わかりました」

じっと見つめられると緊張する。

どんな質問だ？

俺たちに答えられるのだろうか。

「トールちゃん」

キヨカが服の裾を摘んでくる。

「お、おう」

なんだよ。余計に緊張するじゃねえか。

「それでは、お二人にお訊きします」

ドキドキ。

「お二人は、吸血鬼について、どう思われますか？」

「「……………」」

はい？

俺もキヨカも、予想すらしていなかった質問に言葉を失う。

「キュウケツキ？」

一瞬、なんの事かわからなかった。

「キュウケツキって、あのドラキュラかな？」

キヨカの言葉に、ようやく変換できた。

吸血鬼か。

「あの……それって……」

どういう意味か訊こうとしたけど、

「お二人の考えを聞かせて下さい」

それだけだった。

俺たちの考え？

なんだ、これは。なにかの心理テストなのか？

しかし、吸血鬼について？

正直、今までそんな事、考えた事もない。そもそも、普段の生活で、吸血鬼について考える事なんてないし、第一、吸血鬼の事なんてほとんど知らない。

知っている事といえば、人間を血を吸うという事と、十字架や大蒜が苦手って事くらいか。

それ以外で、吸血鬼について……？

「ねえ、吸血鬼って私よく知らないんだけど」

「俺もだ」

「トールちゃんが知ってる事って、どんな事？」

「俺が知ってるのは、十字架と大蒜が苦手で、血を吸うって事くらいだぞ」

「私もそんなものだよ。太陽の光が苦手で、蝙蝠に変身したりもするよね」

「そう言われればそうだな」

「それに、血を吸われた人も、吸血鬼になっちゃうんだよね」

「そんなのもあった気がする」

俺たちの知っている事なんて、その程度だ。きっと、そういう事が好きな人からすれば、俺たちはなんにも知らないのと変わらないんだろう。他にも、特徴のようなものはいっぱいあるはずだ。

だけど、俺たちはそれを知らない。

それに、俺たちが思っている事だって、正解とは限らない。完全にフィクションのものもあれば、勘違いで覚えている事だってあるだろう。

とにかく、俺たちにすれば、吸血鬼についてと訊かれても、答えられる事なんてないに等しい。

「あの……俺たち、吸血鬼ってよくわからなくて……」

俺たちの会話は、二人にも聞こえていたはずだ。これで、アウトかな。

「そうですか。それでは、質問を変えましょう。あなた方は、吸血鬼をどう思いますか？」
どう思う？

これまた、どう答えていいのかわからないな。

「吸血鬼って、本当にいるのかな？」

「えっと……」

吸血鬼は、基本的にフィクションだと思っていた。だって、そんなのが本当にいるわけないだろ。

だけど、この旅に出て――いや、正確には初めて蟲(ベステート)を見た時から、そういう不思議が実在するかもしれないと思い始めた。

俺だって、奇妙な能力があるわけだし、そういう存在を否定できない。

「もしかしたら、吸血鬼というのは、存在すると思います。だけど、会った事もないですし、よくわかりません」

この答えで満足してくれないかもしれないけど、今の俺にはそれ以外は言えない。

「私もいるかもしれないと思います」

そんな俺たちの答えを聞いて、二人はじっと俺たちを見る。

「それでは、いると仮定しまして、目の前にいた場合、どう感じますか？」

「どう感じるか？」

これまた難しい質問だ。

今まで考えた事もない。

「私は、怖いと思います」

迷う俺をよそに、キヨカはすんなりと答えを出した。

「ほう……。やはりそうですか」

男が頷く。

「でも、怖いと思うのは、私はなにも知らないからです。もしかしたら、私が知らないだけで、とっても優しい吸血鬼さんがいるかもしれない。でも、私はそれを知らない。だから、私は知らない事が怖いんです」

知らない事が怖い……か。

確かにそうだな。

だけど、俺は本当にそう思えるだろうか。

例えば、目の前にいる二人が吸血鬼だったとしよう。

俺はこのままでいられるだろうか。

きっと、俺は怖いとってしまう。

これだけ話して、この人たちの事を……いや、なにも知らないじゃないか。

この国に入るには許可が必要で、この人たちは旅人たちを案内しているらしい。そんな程度だ。この人たちについて、なにも知らない。

だったら、もしこの人たちが、俺がイメージする吸血鬼だったら.....怖いと思ってしまう。

「トールちゃん？ どうしたの？」

「あ、いや.....」

別に、二人がそうだというわけじゃないのに、急に怖くなってしまった。

「トールちゃんもそう思うでしょ？」

「.....」

言葉が出ない。

想像だけなのに、体が震える。止まらない。

「俺はそんな風には思えない」

寒い。

「トールちゃん？ 大丈夫？」

「.....」

どうしたんだろう？ 自分でもよくわからない。わからない事も怖い。

でも——単純に、その存在を怖いと思っている。

「俺は無理だ。怖い」

「怖い？ そりゃ、私だって怖いよ」

「違う。俺はキヨカとは違うんだよ」

体の震えが止まらない。

「俺は、吸血鬼が本当にいると思うだけで怖いんだ。違うんだけど、もしこの二人がそうだとしたら.....そう考えるだけで怖い」

ダメだ。俺はキヨカみたいに受け入れられない。

「そうですか.....」

俺の言葉を聞いた女性が、大きなため息を吐く。

期待していたものとは違ったんだろうか。

だけど、これが俺の回答だ。

綺麗事ですませるわけにはいかない。その場だけの上っ面じゃ答えにならない。

そもそも、正解ってなんだろう？ あるとは思えない。だけど、キヨカの回答は、もしかしたら模範的なものだったのかもしれない。

「トールちゃんはダメなんだ」

「そりゃそうだろ。吸血鬼って怖くないのか？ 俺だって、映画くらいのイメージだけど、どれも不気味じゃないか」

吸血鬼、狼男、ゾンビ.....どれもこれも、洋画のホラーじゃ定番だろ。

どれも不気味に描かれていて、恐怖の対象だ。

日本だって、様々な幽霊が描かれている。怨念がどうのとか、怖さだけなら日本の方が上だ。なにしろ、幽霊は人間だったわけだからな。化け物とは違う。

「どうして、キヨカは怖いと思わないのかって方が不思議だ」

「そんなの、思い込みだよ」

「それもわかるけどさ、俺はそんな風に割り切れない。やっぱり、怖いって思っちゃう」
わかるんだよ。わかるんだ。キヨカみたいに、相手を知ればわかりあえるってのは。
だけど、俺はそこまで受け入れられない。納得できない。
頭じゃわかってても、納得できないんだ。

「わかりました。しばらく、そのままここでお待ちいただけますか」
女性はそう言って席を立つ。そして、そのまま隣の部屋に移動する。
それに続いて、男も隣の部屋に移動する。

「トールちゃん……私たちどうなるんだろう？」

「さあ？」

やっぱり、俺の答えが問題だったんだろうか。だけど、嘘でも怖くないとは言えなかった。それこそ失礼だろ。

だから、上っ面だけの事は言えなかった。

「やっぱり、ダメなのかな？」

「すまん。だとしたら、俺のせいだよな」

「そうかもしれないけど、それがトールちゃんの気持ちだもんね」

ここでフォローなしかよ。まあ、キヨカらしいっちゃらしいけど。

「だけど、あれでなにがわかるんだろうな」

「さあ？ 私にもよくわからないけど、きつとなにかわかるんだよ。恐怖心とか？ それとも、オカルト好きとか？」

「それになんの意味があるんだ？」

「そんなの、わかるわけないよ。でも、あの質問だけでわかるなにかがあるんだよ」

「もしかして、あの人たちが本当に吸血鬼とか？」

「トールちゃん、さすがにそれはないと思うよ。だって、あの人たちに牙はなかったでしょ」

「そんなの俺だってわかってるよ」

とにかく――

「荷物は持っておいた方がよさそうだな」

「……………残念だね」

このままだと、入国するのは難しそうだな。だとしたら、ここを引き返すしかない。近くに他の集落があるかはわからないけど、そこを探さないといけないようだ。

荷物を近くに集めておく。すぐにでも出ていけるようにしておく。

「でも、蟲(ベステート)はここにいるんだよな」

「多分そうだね」

なんだか悔しいな。まさか、こんな事で……。

でも、俺のせいだよな。

だけど、他にどうしようもなかった。嘘は吐けない。だから、これでよかったんだ。

ちょっと前まで、ハイテンションだったのに、今じゃこんなに落ち込んでいる。少しの間忘れていた疲れも、急に押し寄せてきた。気持ちに左右されるもんなんだな。

神妙な気持ちで座っていると、二人が奥の部屋から出てきた。

「お待たせしました」

女性が先に戻ってきた。

「あなたに、もう一度だけ質問をさせていただきます」

男が俺をじっと見る。

「.....わかりました」

緊張する。

なにを訊かれるんだろう？

「我々が吸血鬼だとします。それでも、気持ちは同じですか？」

「.....二人が、吸血鬼？」

もちろん、ただの例えなんだろうけど、やけに吸血鬼に拘るんだな。その質問ばかりだ。

なんだか、そこまで続けて訊かれると、本当にこの人たちは吸血鬼なんじゃないかって思ってしまう。

そう言われなければ気にもしなかったのに、そればかりを強調されると余計に気になってしまう。

それよりも、今は質問に答えないと。

この人たちが吸血鬼.....

二人の顔を交互に見る。

吸血鬼というイメージだと、やっぱり怖いという感情になる。

だけど、この人たちを見ている分には、そんな風には感じない。

もっとも、本性を隠していて、その時になったら獯猛になるのかもしれない。

それを考えると怖い。

単に恐怖というだけでなく、信頼を裏切られるようで怖い。

だから、やっぱり答えは決まっている。

すう〜と深呼吸をする。

「.....やっぱり怖いです」

緊張してどうにかかなりそうだけど、どうにかそれだけは言えた。

俺の答えを聞いた二人は、そうですか.....と残念そうに俯く。

やっぱり、怖くないと言わないといけなかったんだろう。だけど、俺の気持ちを偽るわけにはいかない。自分を裏切る事はしたくない。

「それでは――」

そう言って、男がなにかを取り出して、こっちに向けてきた。

反射的に鞆に入れたままの風伯でそれを払う。

「トールちゃん」

一瞬の出来事だった。

今までにない緊張が走った。

「なかなか訓練されているようですね」

男がどこか嬉しそうに呟く。

男が持っていたのは、銃だった。その先には、ナイフが括りつけられている。

反射的な行動だったが、どうやら銃口を逸らす事ができたようだ。

「――ですが、そんな木の刀でなにができますか」

にやりと口元を歪める。

「そうでもないですよ」

命の危機だったかもしれないけど、今の俺はそう感じない。

「どういう事ですか？」

「冗談にしちゃ笑えないですよ」

「冗談？ 冗談でこのような事をする？」

「……………あれ？ 違うんですか？」

淡々と話している俺を、キヨカは不安そうに見ている。

ああ、心配をかけてるのか。

だったら、さっさと終わらせようか。

「出ていけというなら、すぐにでも出ていきます。だから、そういう冗談はやめてくれませんか」

「ですから、なにが冗談だと？ 本気ですよ、こちらは」

「冗談じゃなかったら、これは芝居ですか？ とにかく、あまり気分のいいもんじゃないでしょ」

風伯に力を込め、銃を降ろさせ、その瞬間、相手の喉元に鞘に入れたままの風伯を突きつける

。

「トールちゃん！」

その行動に驚き、キヨカが青ざめる。

それと同じように、女性の方も口を手で覆って青ざめている。

「そのような木の刀では、この銃には勝てませんよ」

「別に、そのつもりはないですよ。勝った負けたじゃないですし」

そう、これはそういうものじゃない。

「でも、できれば銃口をこっちに向けないでもらえませんか。もちろん、キヨカにもね。もし、本気でそうするなら、こちらも本気にならないといけません」

目を逸らさない。ここで目を逸らすわけにはいかない。

まさか、本当にそんな事をするとは思えない。だけど、気を抜くわけにはいかない。

俺だけならまだしも、キヨカを危険な目に遭わせるわけにはいかないんだ。

「キヨカ、ちょっとだけ離れてくれないか」

「トールちゃん、やめようよ。ねえ、二人ともどうしちゃったんだよ」

「どうもこうもないさ。こういう事なんだよ」

説明するような事じゃないしな。

「トールちゃん」

「キヨカ、頼むから。念のためだ」

「.....わかったよ」

キヨカは納得していないようだが、少しだけ俺たちから離れる。

「できれば、あなたも」

視線を女性に向ける。

それを受けて、わかりましたと離れる。

「おっと、その辺で」

怪しい動きをしようとしたので、男の顎に風伯を当てる。

「わかりました」

さて、これでいいだろう。

「じゃあ、説明してくれませんか？ これも試験ですか？」

「なにを.....」

まだ誤魔化すつもりか。まあ、当然そうくるだろうと思ってたけど。

「冗談や芝居ですのような事じゃないでしょ。自分たちの命を担保にするような事じゃない。そんな風に、自分たちの命を危険に晒してまで、どうしてこんな茶番を？」

「茶番？ 確かに、あなたの方が腕がいいようです。ですが、武器としてはこちらが上だ」

「.....そうですか？」

やれやれ、どこまでこれに付き合わないといけないだろう？ ここまでしたんだから、とことん付き合わないといけないんだろうか。

「あなたに俺たちを殺すつもりがないのはわかっています」

「勘違いでしょ」

「いいや、当たっているはずだ。だって、ずっと殺気が感じられない」

「気取られないようにしているとしたら？」

「そうですね.....。俺だって、プロじゃない。そこまでされたらわかりません。だけど、俺にはわかる。あなたに、俺たちを殺すつもりはない」

全く殺気は感じられない。

あれば、どうとでも反撃するだろう。なにせ、風伯をただの木刀だと思っているんだ。ただの木刀が相手なら、銃の方が優勢だ。打撲を受けたとしても、すぐに立て直して反撃できるはずだ

。

「やれやれ.....。仮にそうだとしましょう。あなたは、そんな相手に、ここまでするといわけですか」

「そうですね。殺気がないからこそ、こちらもここまでにしているんです。悪巫山戯だからって、無抵抗でやられるつもりはないですから」

「過剰防衛という言葉をご存じで？」

「これは正当防衛ですよ。過剰防衛というのは、ここまでの時の事でしょう」

風伯を少しだけ鞘から抜く。キラリと刀身が光る。

「こ、これは……」

「木刀なんかじゃないんですよ。真剣です。殺気がなかったから、鞘に入れたままなんですよ。それでも、過剰防衛だと？」

「……………」

男は言葉に詰まる。

「もういいでしょう。銃をおろして下さい」

男はゆっくりと従う。

それを確認して、風伯を戻す。

「説明は、してくれるんですよね？」

視線だけは、一瞬たりとも逸らさない。

「……………」

男は女性に確認するように視線を向ける。

それを受けて、女性は頷く。

「……わかりました。ご説明しましょう」

ふう～。

よかった。

キヨカはずっと、青ざめた顔でこっちを見ている。

こりゃ、後でなにされるかわからないな。キヨカも、殺気くらいは感じられると思うんだけどな……。

とにかく、これで安心だ——と、その瞬間、

「くっ」

俺は再び風伯を振る。今度も鞘のまま。

「冗談や芝居はやめましょうよ」

銃口を再び向けてきたので、今度は完全に叩き落とす。

男は、うっと手首を押さえて蹲る。

「きちんと説明だけはしてくれませんか。俺たちは、別に危害を加えるつもりはないんです。まあ、こんな事をした後だし、説得力はないんですけど」

実際、風伯を突きつけたし、手首を叩いて銃を落とさせたし……まあ、説得力はないよな。

「ゴーウオン、ここまでにしましょう」

女性が口を開く。

「しかし、キッキ」

「もうわかったでしょ」

「……………確かに」

なにがわかったんだ？

「きちんと説明してくれますよね」

俺は女性——キッキさんを見る。

「はい」

キッキさんは静かに頷く。

「お願いします。それと、すみません。一応、手加減はしたんですけど……」

とりあえず、ゴーウォンさんの手を取って、立ち上がらせる。

「トール……ちゃん？」

「大丈夫だよ、キヨカ」

もう怯える事はないはずだ。さすがに、もう一度……ってのはないだろう。これ以上繰り返されたら、いい加減本気になりそうだ。

「違うよ。なにしてるんだよ、もう」

ポカポカと背中を叩いてくる。

「なんだよ」

「どうして、あんな事するのさ。びっくりしたじゃない。いきなり風伯を向けるなんて……。あれは、人に向けていいものじゃないでしょ」

「そう言ったってな、俺だって護らなきゃいけないものがあるば、そのために抜くっての」

「そんなに自分が大事なの？」

「それは否定しないけどな、護らなきゃいけないのは、お前だっけの」

「……………」

キヨカは、ぽかんと口を開けている。

間抜けな顔だ。

「……。勢いとはいえ、どうしてこんな事を口走ったんだろうな。思い返すと恥ずかしい。」

「……」

「……」

「とにかく、あの場合はしょうがないだろ」

「……………あ、うん。そうだね」

キヨカも戸惑っているようだ。

普段は、しつこいくらいなのに、こっちが歩み寄ると急にこうなんだよな。どうしたいのか、よくわからない。なんとも面倒なだけだ。

「それでは、ご説明させていただきます」

「おっ、いよいよか。」

「俺たちは、改めて座り直す。」

「まずは、暴挙をお赦し下さい。本気で危害をくわえるつもりはなかったのですが……それは、見破られていましたね」

「……」

「……」

「……」

「……」

二人は頭を下げる。

「まあ、それは説明次第ですよ」

「トールちゃん」

「あのな、ちゃんとしとくべきだぞ。ここで遠慮とかするのは、日本人の悪いとこだ。美德じゃないぞ」

「そんな事ないよ。そういうところが、いいとこだよ」

「日本以外だと、損しかしないんだけどな」

「……………」

それはキヨカもわかっているようで、なにも言い返してこない。

「どういう理由だったんですか？ それに、あの質問も気になります」

「そうですね。まずは、質問からお答えしましょう」

キッキさんはそう前置きして、

「我々は、吸血鬼について偏見を持っている方を苦手としています。申し訳ありませんが、理由はお答えできません」

それだけで、理由を言っているようなもんだけどな。多分、この国の人たちが吸血鬼なんだろう。もしくは、その信奉者たちか。だけど、なんだか納得できないというか……。信じられないんだよな。

色々な世界や国があるわけだから、そういう国があってもいいんだらうけど……。吸血鬼だろ？ なかなかそういう存在を……ってのは珍しいよな。

それに、この国の人が吸血鬼だと仮定しても、ゴーウォンさんとキッキさんは、とてもじゃないが吸血鬼には見えない。

もしかしたら、国内には吸血鬼がいて、信奉しているので、危害をくわえられると困るので、入国する人を確認している……といったところか？

だとしても、やっぱりさっきの行動は納得できない。さすがに、銃口を向けるのは問題だろ。

「もしかして、国の中に吸血鬼がいるんですか？」

思い切って訊いてみる。もっとも、きちんと答えてくれるとは思っていないけど。

「そうですね……広い意味での吸血鬼は国内に存在しています」

その答えに俺たちは驚いた。

まさか、本当に吸血鬼がいるなんて……。

「ねえ、トールちゃん、吸血鬼って……」

キヨカはどこか不安そうにしながらも、その実、どこか楽しんでいるのがよくわかる。

俺だって、ちょっとは興味がある。広い意味で……ってのは気になるけど。

「あの……それって、俺たちが襲われたりは……」

「それはないと思います」

その答えに胸を撫で下ろす。

「だったらよかった」

「よかった？」

ゴーウォンさんが訊く。

「ええ。そうでしょ。襲われないのが約束されるなら、俺たちは安心していられるでしょ。俺たちだって、争い事は苦手ですから。本当なら、この風伯だって、誰かに向けるなんてしたくないですよ」

ぎゅっと風伯を握る。

これは、あくまでも蟲(ベステート)と戦うためのものだ。これを人に向ける事は、本来はないはず。だけど、自分たちの身が危険に晒されれば、その時は抜かないといけない。それは、俺たちが望むものじゃない。

俺たちが争うのは人じゃないんだから。

できれば、余計な揉め事は避けたい。

「そ、そうですか……」

ゴーウォンさんの声が震えているのはしょうがない。やっぱり、あんな事をした後だもんな。「俺たちは、好戦的なわけじゃないですよ。これだって、自衛のためと、きちんとした目的のためですから」

風伯を掲げる。

「無闇に抜いたりしません。それは信じて欲しいです」

「そうです。トールちゃんは、基本的に莫迦ですけど、意味もなく人を傷つける事はしません」

「おい、キヨカ……それって、フォローになってるのか？」

「そう？ きちんとフォローしてるよ」

「……………」

そんなので？

「わかりました。お二人が危険な人でない事は理解いたしました」

「よかった……」

キッキさんの言葉に、キヨカが緊張を解く。

「ゴーウォン、どうかしら？」

「……いいんじゃないか」

キッキさんとゴーウォンさんは、なにかを確認する。

そして、きちっと座り直す。

それにつられるように、俺たちも姿勢を正す。奇妙な緊張感だ。

「入国審査官キッキとゴーウォンは、お二人の入国を認めます」

キッキさんがなにを言ったのか、俺たちは一瞬理解できなかった。

「トール……ちゃん」

「あ、ああ……」

徐々に状況を理解していく。

「私たち……」

「ああ、入れるんだ」

俺の答えのせいで、難しいかもと思っていたけど、なんとか入れるらしい。

ってというか、入国審査官って。まあ、なんとなくわかっていても、そう名乗られるとやっぱり違う。

「本当にいいんですか？」

不安になったので確認する。

「ええ、あなた方でしたら」

よかった……。

俺のせいで中に入れなかったら、蟲(ベステート)を封印する事ができないとこだった。

「でも、どうして……」

「どうしてとは？」

ゴーウォンさんが訊いてくる。

「だって、俺はあんな事を……」

なんだかんだで、風伯を向けてしまった事が引かかる。

「あれは、確かに正当防衛でした。あなたは、刃を向ける事はしなかった。あなたに殺意はなかった。言い訳をさせていただければ、こちらとしてもそのつもりはありませんでしたが」

「そうだとしても、ああすれば反撃を受ける事だって……。そのせいで、命を奪われる可能性だって……」

俺はそのつもりはなかったけど、相手によれば容赦なく殺そうとする人だっているはずだ。

まして、旅をしていれば自己防衛の意識もあるだろうし、武器を所持している人だって少なくない。

そんな相手を下手に挑発すれば、命の危険性だってあるだろう。

「確かに仰るとおりです。その危険性は、重々承知していますよ。それを含めて、この仕事に誇りを持っています。命を懸けて、国を守れる――それが、この入国審査官という仕事ですから」

ゴーウォンさんは、その事を本当に誇りに思っているのだろう。とても楽しそうに話している。

それを聞いているキッキさんも、同じように明るい表情をしている。

この人たちは、本当にこの事を誇りに思っているんだ。

すごい……。

そこまで、この国を思えるなんて……。

こんな人たちに思われる国は、きっと――いいや、間違いなく素晴らしい国なんだろう。

素晴らしくない国に、素晴らしい国民はいない。

「すごいね、トールちゃん」

「ああ」

こんな国に入る事ができるなんて、旅の醍醐味ってこういうのだろうか。

こんな国に巡り会えた事が嬉しい。

「それでは、早速向かいましょうか」

そう言って、キッキさんが席を立つ。

「ふう～、疲れたよお」

キヨカは大きなため息を吐く。

「確かに」

旅の疲れに加えて、ここでの緊張は、かなり疲れるものがあった。

「とりあえず、ゆっくり休みたいね」

「そうだな。ぐっすり寝たい」

あまりの緊張で、疲れや眠気を忘れていたが、こうして緊張の糸が解けると、一気にそれらが押し寄せてきた。

もう、歩くのも本当はつらい。だけど、この国はどういう国だろうという楽しみが勝る。

「そうでしたら、まずは宿へご案内しましょう。それでは、こちらへ」

「どうぞよい旅を」

ゴーウォンさんは立ち上がり、俺たちを見送る。どうやら、彼は一緒には来ないようだ。

小屋を出ると、相変わらず暗かった。

太陽は出ていないようなので、きっと夜なんだろう。

「ここからは、私が案内させていただきます。改めまして、入国審査官兼案内人のキッキと申します」

キッキさんは、歩きながら名乗る。

「お二人は、どうしてこの国をお知りになったんですか？」

「えっと……」

俺たちは顔を見合わせる。

別に俺たちは、この国を目指していたわけじゃない。だから、この国がどういう国なのか知らない。

「私たちは、色々な場所を旅しているんです。ちょっと、探しているものがあるんですけど……。それで、たまたまここに着いちゃったというか……。ねえ、トールちゃん」

「えっ？」

ここで俺に振るのかよ。

「えっと……そうですね。だいたい、キヨカが言った通りですね。この国を目指していたというわけじゃなくて……。だからそのですね、俺たちはここがどういう国なのかとか、全く知らなかったんです。ただ、もしかしたら、俺たちが探しているものがあるかもしれない……というだけですね」

キヨカの説明を補足するだけになるが、こんなもんでいいだろう。嘘は言っていない。ただ、誤魔化している部分は多いけど。

「そうですか。あなた方と似ているという旅の二人も、よく似た理由だったようです。この国には偶然たどり着いたという事でした」

「そうなんですか」

その二人は、どうやら俺たちにかかなり似ているらしい。目的ももしかしたら一緒だったりしてな。……なんて、そんなはずはないよな。

「その二人って、どんな感じだったんですか？ さっきから、私たちに似ているって言われて、ちょっと気になって……」

「そうですね。やはり、気になってしまいますよね」

正直、俺も気になっている。俺たちに似た旅をしている二人。その目的はなんだったんだろう？

まさか、その二人が蟲(ベステート)を封印しているわけでもないだろう。もし封印し終えているなら、俺たちがここに来る理由はない。

しかし、蜘蛛(アラネーオ)はここにいると感じている。だったら、蟲(ベステート)はまだここにいる。

その旅の二人も、蟲(ベステート)に関係しているんだろうか。

「その二人は……そうですね。男の方は、絵を描かれているようでした。エスネが……私たちとお同じく、入国審査官兼案内人をしている者ですが、そのエスネが旅の方からいただいたという絵を見せていただいたのですが、それはもう素晴らしいものでした」

「その人たちって、絵描きさんなんだ……」

絵を描きながらの旅か……。そういうのもいいかもしれないな。

だとしたら、その人たちは蟲(ベステート)とは無関係みたいだな。

「詳しい事は存じませんが、そうなのかもしれませんね」

「そんな絵なら、見てみたいかも」

「よろしければ、エスネに確認をとりまして、彼女がよければご案内しますよ」

「お願いします」

ナイス、キヨカ。

どんな絵なのか、俺も興味がわいてきた。もっとも、芸術に詳しいわけじゃないけど。

そんな話をしていると、目の前にあの巨大な扉が迫っていた。

「さあ、こちらにどうぞ」

あれ？

キッキさんは、扉の正面とは違い、崖の方に移動する。

「こちらです」

そう言うと、小さな扉を開けた。

「ねえ、トールちゃん」

「あんなところに、扉なんかあったか？」

キッキさんが開けているので、実際にそこにあるのは間違いないんだけど、そこに扉があるようには見えなかった。

本気で、俺たちは、この大きな扉が開くんだと思っていた。

だけど、よく考えれば、それは効率が悪いというか……大きなものが通る時は開くんだらうけど、人が出入りするだけで、こんな大きな扉を開け閉めしていたら大変だらう。

それで、こういう小さな扉があるのは理解できた。

けど——やっぱり、ここにそんなものはなかった。

「さあ、どうぞ中へ」

その扉の前に立つと、その向こうには確かに街が広がっている。賑わっているようで、その声も聞こえてくる。

「キッキさん、この扉って……」

「それは、極秘事項です。申し訳ありませんが、ご説明はできません」

「は、はあ……」

とにかく、そういうものだと思うしかないようだ。

「どうなってるんだらうね」

「俺も気になるけど、これ以上は無理だろ」

「そうだね」

俺たちは、後ろ髪を引かれつつ、扉をくぐる。

「「……………うわぁ」」

俺たちは、声を揃えて感心していた。

ものすごい賑わいだっただ。

市場かなにかだろうが、見渡す限り屋台が並んでいる。

どこからともなく……というか、この辺全てから、いい匂いが。

ぐう〜きゅるる。

と、腹の虫を刺激されてしまう。

「トールちゃん、これはきついよ」

「そうだな」

しばらく、なにも食べていない俺たちに、これはかなりきつい。

「よろしければ、なにか食べてから宿に向かいましょうか」

キッキさんが、そう提案してくれる。

睡眠欲か食欲か。

どちらもどちらだが……。

「食べようよ」

「そうだな」

俺たちは迷う事なく、食欲を優先させる。

やっぱ、空腹すぎたら眠れないだろう。

「なにか、食べたいものはありますか？ もしくは、苦手なものはありますか？」

「この国の食べ物を知らないの、食べたいものはわかりませんが、ただ苦手なものは、そんなに……」

「できたら、ちゃちゃっと食べちゃいたいです」

キッキさんは、なるほど……と、俺たちの要望を聞いてくれる。

「とりあえず、ここを歩きながら、食べたいものがあれば仰って下さい」

「「わかりました」」

見事、俺たちの声が揃った。

「トールちゃん、なに食べる？」

早速、キヨカは品定めを始めている。

「そうだな……」

それは俺も同じか。

だけど、どの屋台からも美味しそうな匂いがしている。

なにかを焼いて串に刺しているものや、炒めて皿に盛っているもの、そしてなにかを煮込んでいるスープ。

どれもなにかがわからない。ただ、この国の人たちは、美味しそうに食べている。

パンくらいは、俺にもわかるんだけど、他の料理はさっぱりだ。

「ねえ、あれなんかどうかな」

キヨカが指したのは、大きな寸胴鍋をかき混ぜている屋台だった。どうやら、スープらしい。ただ……。

「マジであれか？」

「美味しそうだよ」

それは認めよう。

ただ、その色が問題だと思うんだ。

その料理が、椀に盛られて置かれているのだが、その中身の液体が赤い。

匂いだとそう感じないんだけど、見た感じはかなり辛そうなんだが……。

空腹の胃に、かなりの刺激にならないか？

「なあ、あんな辛そうなもの、大丈夫か？」

「あの料理は、辛くはありませんよ。さっぱりとしていまして、健康な人はもちろん、体調の優れない人にも人気の料理です」

キッキさんが説明してくれる。ただ、なんの料理かは教えてくれないんだ。そこが知りたいのに。

「ねえ、あれにしようよ。私たち、病人みたいなものだし」

「そうだな」

体調の優れない人でも大丈夫なら、今の俺たちにぴったりだろう。

「じゃあ、あれにするか」

「うん」

俺たちは、それぞれ財布を取り出す。そして、その料理の代金を支払う。

この財布は、かなり便利だな。両替なしで、その場所の通貨になってるんだもん。

スムーズに買い物ができる。

「あちらに、テーブルがありますので」

キッキさんが教えてくれたそこに向かう。

そこには、大きな長い机が並んでいて、この国の人たちがそこで食べている。わいわいと楽しそう。

俺たちも、そこでその赤いスープらしいものを食べる。

「ん？」

木のスプーンですくうと、中からは米らしいものが出てきた。

「これって、お粥かな？」

「……そうみたいだな」

米とはちょっと違うみたいだけど、これはスープというよりはお粥だよな。俺たちが知っている料理だと、それが一番近い。

スープと一緒に口に入れる。

熱いんだけど、体が冷え気味だったのでありがたい。

「これって……」

「さっき、飲んだものと……」

俺たちがさっき小屋の中で飲んだものに味が似ている……というか、ベースは同じだろう。あっさりしていて、弱った胃にも優しい味だ。

少し香辛料が利いていて、食べれば食べるほど食欲がわいてくる。

俺たちはあっという間に、そのお粥らしいスープを飲み干した。

「美味しかったね……」

「ああ、旨かった」

本当なら、まだまだ食べたいところけど、いきなり暴食するわけにはいかない。

「とにかく、このくらいにしとくか」

「そうだね。お腹も落ち着いたし、ゆっくり休みたいよ」

久しぶりの食事に、俺たちは満たされていた。

「それでは、宿にご案内します」

食器類を片付け、キッキさんについて歩いていく。

宿に向かうには、この屋台街を抜けるようで、途中何度も買い食いしたい衝動に駆られる。誘惑が多い場所だ。

「トールちゃん、食べちゃダメかな？」

「……食べ過ぎて気分が悪くなくても知らないぞ。それに、寝る直前だと、太るんじゃないか？」

「うっ……そうだね」

どうやら、後半が効果的だったようだ。

やはり、女の子に「太るからやめとけ」というのは、かなりの効果があるらしい。それはキヨカも同じだったようだ。

それでも諦めきれないのか、物欲しそうな目で屋台を見ている。

「キッキさん、この屋台って今日だけですか？」

「いいえ。毎日こういう感じですよ」

「だってさ」

それを聞いて、キヨカの表情が明るくなる。

「じゃあ、明日も食べれるんだね」

「そうみたいだな」

「よし。明日は、もうちょっとがつつり食べるよ」

「程々にしとけよ」

いくら一晩寝たからって、暴食はよくないだろう。だけど、その気持ちもわかる。こんないい匂いが充満してるんだ。気が済むまで食べたくなくてなにが悪い。

この調子だと、俺も食べまくりそうだな。実際、軽く食べたせいで、余計に腹が減ってきた。

この匂いは刺激が強すぎる。

そんな匂いに刺激されまくりながら、なんとか通り抜けると、どこか寂れた雰囲気のある場所に出た。

「この辺は、先程の場所とは違いまして、宿屋や酒場が並んでいる場所です。治安は安定していますので、ご安心下さい」

ちょっと、酒場と聞いて不安に思ったが、キッキさんの言葉で安心した。この人なら、嘘はないだろう。

……なにか、こういうのにトラウマがあると思ったら、少し前に現地の人に案内してもらった宿で、窃盗事件に遭って、そこから大きな騒動に巻き込まれたんだ。それが、どこかで不安を増していたんだろう。

「よかったね、トールちゃん。ここは安心できそうだよ」

「ははっ、そうだな」

どうやら、キヨカもその事が頭にあっただらしい。

「どうかされましたか？」

キッキさんが振り返る。

「いいえ、なんでもありませんよ。今日は、ゆっくり眠れそうだな……って、トールちゃんと」

「そうですか。それでは……こちらの宿でいかがでしょう？ 設備は整っておりますし、宿泊代もさほど高価ではありませんので、ご満足いただけるかと思えます」

財布を開けて、所持金を確認する。

「トールちゃん、ここにしようよ」

「そうだな」

確認するまでもなかった。

この世界——というか、この国は、物価が安いのか、俺たちの所持金からすれば、充分すぎるくらいだ。日本円に換算しても、おそらく一〇〇分の一くらいだ。

これなら、仮に長期間の滞在になっても、しばらくは大丈夫だろう。

「それでは、宿泊の手続きをいたしましょう」

俺たちは、キッキさんに手伝ってもらって、なんとか宿泊する事ができるようになった。

「それでは、ごゆっくりお休み下さい」

それではまた、と挨拶をして、キッキさんは宿を出ていった。

宿の部屋に入ると、どっと疲れが押し寄せてきた。

「トールちゃん、おやふみ～」

部屋に入るなり、キヨカはベッドに倒れ込んだ。

「おい、キヨカ。そのまま寝るなって。せめて、シャワーくらい浴びとけよ」

いくらなんでも、あの雨に打たれた後だ。塩まみれとまではいかないまでも、全身に塩がついている。それを洗わないと、肌が大変な事になるだろ。

「もう……今日は疲れてるから、そういうのはまた今度にしようよ……」

「はあ？ 疲れてようが関係ないだろ。俺はちゃんと言ったからな、後悔しても知らんぞ」

「私だってしたいけど、そういうのは元気な時に……」

「まあ、いいけどな」

なんだか、会話が微妙にかみあっていない気がするけど、俺は言うべき事は言った。

これ以上は、キヨカの実任だらう。自己責任でなんとかするだらう。

見ると、キヨカはすびすびと寝息をたてている。

後悔しても知らないからな。

俺は、キヨカとは違ふからな。

疲れてはいるものの、なんとかシャワーだけは浴びておく。

「ふう～、気持ちいい」

体にまとわりついていた塩が流れていく。

やっぱり、あそこは地面が塩だったからな……。雨は普通だったかもしれないけど、やっぱり海に入った後みたいな感じだったもんな。

それらが流れて行って、さっぱりする。

疲れもこのまま流れていきそうな気がする。

熱いシャワーで、体も温まる。

そういや、そもそも何日も風呂どころか、シャワーすら浴びてなかったんだもんな。

雨に打たれまくってたし、そのほとんどを眠って過ごしていたから、あまりきにしてなかったけど。

さすがに、湯船に浸かるのは時間が掛かるので、今日はシャワーだけだ。

さっぱりとしてから、俺もベッドに倒れ込んだ。

そして、すぐに眠りに落ちた。

「トールちゃん。お～い、トールちゃんってば」

翌朝、キヨカに無理矢理起こされた。

「なんだよ」

よっぽど疲れてたんだろう。熟睡していた。といっても、時計がないので、どのくらい眠ったのかわからないんだけど。

それでも、充分眠った気がしている。むしろ、寝すぎたかも。そのせいもあってか、どうも少しぼんやりしている。

「どうしたんだよ、いったい」

いくら熟睡してたからって、無理矢理起こされるのは気分がいいもんじゃない。

「さあ、お腹ぺこりんこだよ。食べに行くよ」

そう言いながら、荷物をまとめて部屋を出る。

「トールちゃん、おいてくよ」

「なんなんだ、ったく……」

荷物を持ってキヨカを追う。

フロントまで来ると、宿の人に呼び止められる。

「キッキを呼びますので、少々お待ち下さい」

どうやら、キッキさんと呼んでくれるらしい。

「ねえ、トールちゃん、もしかしてずっとキッキさんも一緒なのかな？」

「……そうっぽいな」

まさかと思うが、ここにいる間、ずっとキッキさんが同行するのだろうか。

まあ、この国の事をなにも知らないなので、色々と案内してくれるのはありがたい。ルールも知らないし。だけど、それって裏を返せば、ずっと監視されてるって事だよな。

入国する前にされた質問の事もあるし、なんだか落ち着かない。

しばらく待っていると、キッキさんがやって来た。

「お待たせいたしました」

「あの……もしかして、ずっとキッキさんが一緒に来てくれるんですか？」

キヨカが訊くと、キッキさんは笑顔で、そうですよ、と答えてくれた。

「お二人だけで過ごされたいとは思いますが、入国前にも説明しましたが、この国では外からの人間に対して敏感です。ですので、私たちが同行する事で、安心して過ごせるのです。ご理解いただけますか」

なるほどな……。

「わかりました」

俺たちは頷く。

この国の人たちに迷惑を掛けてまで、自分たちの都合を優先させようとは思わない。もちろん

、そう思わない旅人もいるだろう。その場合はどうなるのかわからないけど、そういう旅人はそもそも入国できないんじゃないかと思う。

「どこかご希望の行き場所はございますか？」

「朝ご飯が食べたいです」

キヨカは元気よく答える。

それがちょっと恥ずかしかったが、俺も行きたい場所は同じなのでなにも言わない。

「わかりました。食事ができるばしょですね。ただ、あの屋台は、この時間は休んでおりますので、別の場所でもよろしいですか？」

「そっか.....あの屋台は休みなんだ」

キヨカが残念そうに呟く。俺もちょっと残念かも。

「ですが、もうしばらくすれば、営業していますので、また後ほどご案内します」

「わかりました」

「それでは、ご案内します」

そう言って、キッキさん先導で宿を出る。

宿の外は、やっぱり薄暗かった。所々に街灯があるので真っ暗とまではいかないまでも、それも明るいわけじゃないので、やっぱり暗く感じてしまう。

空を見上げて、曇り空という感じじゃない。

やっぱり夜みたいだ。

「そういえば、お二人とも今日には出発されるのですか？」

不意にキッキさんが訊いてきた。きっと、荷物を持っているからだろう。そう思うのが普通か。

「いいえ、もう少し滞在しようと思っています」

「でしたら、先程の宿に預けておかれては？ それとも、あの宿はお気に召しませんでしたか？」

そっか。あの宿が嫌で、違う場所に泊まりたいと思われたか。

「そうじゃないんです。なんというか.....」

「これまでの旅で、宿に荷物を置いたままにしてたら、泥棒さんが入っちゃって.....。それから、ずっとこうするように決めました」

俺が言い澁んでいると、キヨカが説明してくれた。

「そうだったんですか。ですが、この国はそういう心配はございませんので、預けられてはいいがですか？」

「ありがとうございます。でも、俺たちはこの方が落ち着くので」

「わかりました。さて、ここです」

そんな話をしている間に、目的の場所に到着した。

「うっわあ.....なんだかいい匂いがするよ」

ドアが閉まった状態でも、微かにいい匂いがしてくる。

「では、どうぞ」

キッキさんは、嬉しそうに木のドアを開けてくれる。

その瞬間、中から香りが押し寄せてくる。

きゅるるるう。

と、腹の虫が騒ぎだす。

「やあ、キッキじゃないか。……ん？ そちらは、旅の方かい？」

どうやら顔馴染みらしい。恰幅がよくて口髭を蓄えた店主らしいエプロン姿の男が話し掛けてくる。

「ええ」

キッキさんは笑顔でそれに答えながらカウンター席に座ったので、俺たちもその隣に座る。

「そうか。旅の方は久しぶり……でもないか。この前もあったな」

「そうですね。……えっと、なにかご希望の……」

「この国の料理はわからないので、お勧めでいいですよ」

そう言うと、じゃあという事で、キッキさんが色々と注文してくれる。

「じゃあ、しばらく待っててくれよ」

そう言いながら、水が入ったグラスをそれぞれの前に置くと、てきぱきと調理を始める。

高さの関係もあって、なにをしているのかはわからないけど、いい香りが食欲をそそる。

「なんだろうね」

「楽しみだな」

やっぱり旅の醍醐味は、その土地ならではの料理だろう。

「お二人は、旅をされて長いんですか？」

キッキさんが、隣に座っていたキヨカに訊いた。

「そうですね……。私たちが旅を始めて、どのくらいだろう？」

キヨカがこっちを向いて訊いてくる。

どのくらいだろうな……。

厳密にはわからないんだよな。だいたいだけど、

「多分、一ヶ月半くらいじゃないか？」

「そのくらい……かな？」

キヨカも曖昧らしい。

「だいたい、そのくらいです」

「そうですか。旅に慣れているようでしたが……」

「そんな事ないと思いますよ」

「はい、お待たせ」

会話に割り込むように、店主が料理を俺たちの前に置く。

「どうぞ、美味しいですよ」

出されたそれは、透明の器に赤い液体が入っている。

「トールちゃん、これって……」

普通なら血でも思い浮かべるんだろうが、俺たちが思い浮かべたのは、あの小屋で飲んだ飲み物だった。

「どうぞ。美味しいですよ」

そう言いながら、キッキさんは既に口にしている。

それを見て、俺たちもスプーンでその液体を飲む。

「「……………美味しい」」

俺たちは顔を見合わせる。

やっぱり、あの時飲んだものと同じ味がする。だけど、こっちの方が、色々と味がするとうか、手が加えられている。

「あの時、とても美味しそうに飲まれてましたので注文しましたが、その冷製スープも気に入っていただけみたいですね」

キッキさんが嬉しそうに俺たちを見る。

「これって、なんですか？」

「これは、この地方特有のトマトで作ったものですよ。えっと……お二人の国にトマトというものは……」

「ありますよ。俺たちの世界のは、もっと酸味があって……でも、甘いのもあるんですけど、もっとドロツとした感じですね。それも好きなんですけど、これはもっと喉越しがよくて……」

「美味しいです」

俺の説明を、キヨカが見事に一言で表した。

そう——美味しいんだ。

「そうですか。この国では、様々な料理に使われているものでして、国民の皆が好きなんです」

「そうなんですか」

「トールちゃん、これ、本当に美味しいね」

スープなので、少し塩味がするのだが、それもまた美味しい。俺たちは、あっという間に飲み干してしまった。

「メインだ」

そのタイミングを見計らったように、大きなお皿に載った料理が前に置かれる。それと一緒に、なにかを薄く焼いたものも置く。

「これも、とても美味しいんですよ」

言われるまでもなく、匂いでそれはわかった。香ばしい匂いが刺激してくる。

「これも、美味しそうだね」

「ああ」

自然と唾が出てくる。

それをゴクリと飲み込む。

出された料理は、なにかを揚げたもののような。そこに、小さく賽の目に切られた野菜を混ぜたソースが掛かっている。それも赤いので、きっとこれもトマトなんだろう。本当にこの国の人たちは、トマトが好きなんだな……。

だけど、これだけ美味しければ納得だろう。この国のトマトは美味しい。

衣にも、なにかを混ぜているようだ。おそらくは、ハーブかなにかだろう。香ばしい匂いに混じって、爽やかな香りもする。

ナイフで切ってみると、じゅわっと肉汁が溢れてくる。どうやら、なにかの肉の香草パン粉焼きといったところか。

「いい匂いだね」

「そうだな」

「だけど、これってなんのお肉かな？」

「……………なんだろうな？」

こういうのって、たまに俺たちからすればゲテモノの場合があるよな。蛙とか鰐とか。だからこそ、そこは訊かずに食べようと思ったんだけどな……。

「これは、この国で家畜として飼育されているカチンキシワという鳥の肉を、香草を混ぜたパン粉をまぶして、香り油で揚げ焼きにしたものに、トマトと野菜を混ぜたソースを掛けたものです」

俺たちの会話を聞いて、キッキさんが説明してくれる。

「カチンキシワ……？」

よくわからないが、とにかくこの国でよく食べられているものなんだろう。

どんな生き物なのか、やっぱり気になる。かといって、生きている状態を見たいというわけでもないんだけど。見てしまうと、食べづらくなったりしそうだし。

「トールちゃん、これって鶏肉みたいで美味しいよ」

既にキヨカは食べていた。

「……そうなんだ」

それを見て安心した。いつもなら、こういう毒味まがいの事は俺にさせるのに、今回は自分からすすんで食べてるよな。まあ、怪しい料理ってわけでもないんだけど。それに、これだけいい匂いだし、不味いわげがないよな。

「じゃあ、俺も」

ナイフで一口大に切って食べる。

「……………うわっ」

確かに、食感というか、味は鶏肉に似ている。きっと、そんな感じの生き物なんだろう。

肉汁がじゅわっと口の中に広がるんだけど、その油をソースの酸味が爽やかなものにしてくれる。口の中で衣の香草のいい香りが広がる。

「すっげえ旨い」

俺たちは、その料理をがつつくように食べる。

「そのままだも美味しいですけど、こうして食べるのも美味しいんですよ」

見ると、キッキさんは、料理と一緒に出されたなにかを薄く焼いたパンのようなものに、なにかの葉と香草焼きを巻いて食べている。

「私もしてみようっと」

キヨカは早速真似をしてみる。

「……………うわっ、なにこれ」

「トルちゃんもしてみなよ、と言われて、俺も同じようにしてみる。

「なんだか、一緒に巻いた葉が香草のようで、少し匂いが強いのが気になる。」

「早く食べてみて」

「ああ」

キヨカに急かされて、とりあえず一口。

「……………」

「な、なんだ、これ。」

「うまっ」

「そのまま食べた時とは、全然違う料理に思えるくらいだ。」

「ちょっと強いと思った匂いも、別に気にならない。」

「キヨカ、これマジで旨いな」

「本当だね。このトルティーヤみたいなのがいいよね」

「トル……なんだ、それ？」

キヨカが莫迦にするように……いや、完全に莫迦にした目で見てる。

「トルちゃん、トルティーヤ知らないの？」

「知らねえよ。どこの国の料理だよ」

「それは私も知らない」

「……………」

「なんだよ、それ。キヨカも知らないくせに、俺をそんな目で見てるのか。」

「国は知らないけど、料理は知ってるよ。トウモロコシの粉で作ったものなんだよ。こんな感じで薄くパンみたいに焼いたものなんだよ」

「それって、……ナンみたいなものか？」

「ナンなら、カレー屋で見た事がある。薄いパンみたいなものだよな。」

「そうだね。そのトウモロコシ版かな」

「へえ～」

「そんな料理があるんだな。えっと……なんだっけ？ 既に忘れてしまった。」

「こんな風にトルティーヤみたいなので巻いてると、なんだかタコスでも食べてるみたいだね」

「タコス？ 聞いた事はあるけど、食べた事がないからな……。なんとも返事ができない。」

「もしかして、タコスも知らないの？」

「知ってるけど、食べた事はないな」

「知ってるってのも、鮫は使ってないぞってくらいかな。あとは、なんとなく辛そうなイメージくらいか。」

「そういや、どっかの喫茶店でタコライスってのがあった気がする。注文した事はないけど。だから、俺にわかるのは、これが鮫ご飯じゃないってくらいだな。」

「そうなんだ。まあ、こんな風な食べ物だよ。もちろん、巻くものは違うし、サルサソースを掛

けたりするけど」

キヨカの説明を、ふうんと聞いておく。色々な名前を出されても、俺にはよくわからない。なんとかソースってのも、想像すらできない。とにかく、そんな解説はどうでもいいんだ。

この料理が旨い——それでいいじゃないか。

朝から肉ってのもどうかと思わなくもないけど、この料理ならぺろっといけるな。ジューシーながらもあっさりしていて、むしろ食欲をそそられる。事実、あっという間に平らげてしまう。

「すごい食べっぷりだな」

店主がにやにやと俺たちを見る。

「とっても美味しかったです」

キヨカが笑顔を向ける。

「おっ、そりゃ嬉しいね。旅の人にそんな褒められちゃ、サービスしなきゃってもんだな」

「期待しちゃうよ」

そんなリップサービスに、キヨカは笑顔で返す。

「しょうがねえや。あんたの笑顔で、ちょっとサービスしとくぜ」

店主はわかりやすく照れている。結局、俺たちの食事代を半額近くまで安くしてくれた。

元々、手頃だったものが、さらにお得になった。

「私の笑顔ってすごいね」

店を出ると、キヨカは自慢そうに俺を見る。

……まあ、笑顔は悪くないかな。

こいつの笑顔のお蔭で、お得な食事ができたわけだし。今回ばかりは、天狗になってもいいんじゃないかな。

「そうですね。キヨカさんの笑顔は素敵だと思います。長い間、こうして旅の方をあの店にお連れしていますが、こういう事は初めてです」

「そうなんだ。ラッキーだったんだね」

「そうだな」

キッキさんの言葉を聞いて、こいつの笑顔の恐ろしさを実感した。

笑顔だけなら、確かに誤魔化せるかもしれないな。

っていうか、こいつに限らず、女の人笑顔って、たまにすっげえ事あるもんな。

「それでは、どこかご案内いたしましょうか」

「そうですね……とりあえず、この国の色々な場所を見たいです」

この国がどのくらいの広さなのかもわからないし、なにがあるのかもわからない。

そして、蟲(ベステート)がどこにいるかもわからない。

「そうだね。色々歩こうか」

「そうですか。ですが、お二人の旅の目的は……」

「大丈夫ですよ。色々な場所を行けば、きっと見つかるはずですから」

「……そうですか。それでは、ご案内します」

キッキさんは、どうも腑に落ちないようだが歩き出す。

「お願いします」

キッキさんは、まずは昨日通った市場に案内してくれた。

「ここは、もうしばらくすれば、昨日のように賑わうのですが、この時間はこのように静かな場所です。ここが、この国で最も人が集まる場所です」

ここが、商業の中心ってわけか。

昨日は人が多かったのであまり見れなかったけど、こうして人がまばらな時に見ると、他にも様々な店があるのがわかる。

屋台が並ぶ通りのすぐ側には、日用品や雑貨を売っている店があるし、食材を売っている店もあるようだ。

「駅前の商店街みたいだね」

「……そうだな」

アーケードはないものの、雰囲気はそんな感じかもな。

夜には、屋台が並んでいる感じか。

「なにかお買い物でもされますか？」

買い物か……。

「どうする？」

やっぱり、女ってのは買い物が好きだからな。こういう場所だと、わくわくするんじゃないのか？

キヨカがどうかはわからないけど、一般的にはそういうもんだよな。そして、男は待たされて退屈になる……と。

「そうだね……。保存できる食べ物が買える場所ってありますか？」

キヨカが口にしたのは、なかなか実用的なものだった。

そういえば、前の世界で大変な事になったからな。その前だって、ヒナゲシさんとリュウドウさんにお世話になりっぱなしだったもんな。俺たちは、なんの準備もしてなかったんだ。

今みたいに、お店が充実しているとは限らないんだ。なにもない森の中の可能性だってあるわけだ。

「保存できる食べ物ですか……」

「はい。やっぱり旅をしていると、こういう街がない事もあって……」

「なるほど。確かにそういう事もあるんですね」

キッキさんは納得したようで、ポンと手を打つ。

「それでしたら、こちらへ」

キッキさんに案内されて、俺たちがやってきたのは、大きなお店だった。ただ、外観からはどうい店なのかはわからない。

「こちらでしたら、ご希望のものがあると思いますよ」

キッキさんがまず中に入る。それに続いて、俺たちも中に入った。

「……………なるほど」

確かにここならありそうだ。

店の中には、乾物がずらっと並んでいる。

「すごいね、トールちゃん。いっぱい食材があるよ」

「そうだな」

乾燥させた茸のようなものをはじめ、塩漬けにした肉もある。他にも干した芋のようなものや、乾燥させたパンのようなものまである。

「乾物屋……か？」

まあ、実際の乾物屋はこういう品揃えじゃないだろうけど、乾燥したものを扱ってるから、そういう事でいいよな。

「ここなら、色々と揃えられるね」

「そうだな。こんなに種類があったら、ちょっと迷うけどな」

「そうだね」

保存食を携帯するのはいいんだが、俺たちは調理ができない。……厳密には、調理器具がない。そんなものを持ち歩けない。

というわけで、できればそのままでもいいものが望ましい。

「これは……ちょっと使いにくいかな」

「そうだな。料理しないと難しいよな」

そんな感じで、俺たちは様々な食材を調達する事ができた。

「……重いよ」

「しょうがないだろ」

ちょっと調子に乗って買いすぎたか？

でも、これでも一週間かそこら……節約していけば、三週間くらいは大丈夫だろう。

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、もっと多く携帯していた。本当なら、この倍くらいは必要なんだろう。

「大丈夫ですか？」

荷物の量に悪戦苦闘している俺たちを見て、キッキさんは心配してくれる。

「大丈夫ですよ。いざとなったら、トールちゃんが持ってくれるし」

「おい」

結局は俺なのか。

「あのなあ。俺はこれ以外にも、スパイスを持ってるんだぞ」

「大丈夫だよ。男の子でしょ」

「……………」

なんだろうな、この都合のいい感じは。

「お二人とも、やはり荷物は宿に預けておかれては……」

「いえ、やっぱり俺たちがずっと持っていたいんです」

「ありがとうございます。私たちなら大丈夫です」

こういう状況なので、預けたい気持ちはあるんだけど、やっぱり自分たちの見える場所に置いておきたい。

この国で、また盗まれるとは思っていない。この国なら安全だろう。そう思っているけど、やっぱり預ける事はできない。

いつなにかが必要になるかわからないし、これがベストなんだと思う。

「そうですか。お二人がそうお望みでしたら。他には、なにかご入り用のものはありますか？」

「他には……」

なにかあるかと思いきよカを見る。

「他にはないよね。あとは観光と、美味しいものだね」

「……………はあ」

まあ、そうだよな。

観光するのは間違っていないし、美味しいものってのも賛成だ。

朝食を食べてから、それほど時間が経っていないから、まだそんなに空腹感はないってくらいか

。「そうですか。それでは、国の中をご案内しましょう」

俺たちは、キッキさんに案内されて、国の中を回る事になった。

キッキさんに案内されて、公園や並木道を歩いている。

この国は、自然が豊というか、緑が多かった。

街路樹も多く、そのほとんどが大きなもので、まるで道に覆い被さるように並んでいる。

これでいい天気なら、木陰だらけだろう。

「そういえば」

ふと思いついた。

「なんでしょう？」

「この国って、ずっとこんな感じなんですか？」

「こういう感じ……ですか？」

曖昧な質問に首を傾げる。

「ええ。ずっと夜みたいで暗いじゃないですか。っていうか、今は朝なのか夜なのか、よくわからないっていうか……」

「そういえばそうだね。美味しい料理で、すっかり忘れてたよ」

おいおい。

空を見上げて、日が射す様子はない。

「今は、時間にすれば朝になるのでしょうか。もうすぐお昼ですね」

「私の腹時計もそうだね」

「ちょっと黙ってろ」

「なんだよ、もう……」

キヨカが膨れるが、それは放置だ。

「でも、もうすぐ昼なのに、太陽が見えないですよ。まるで夜みたいだ」

「そうですね。やはり気になられますか。しかし、お二人も、この世界を旅されていたら、ご存じかと……」

「これって、この国だけじゃない……んですか？」

そう言ってから、よく考えればそうだと気付いた。

この国だけが、こういう状況だとは考えられない。もっとも、場所によってずっと昼だったり、夜だったりという可能性もある。

だけど、この世界全体だとすれば、キッキさんの疑問も当然だ。

同じ世界にいる俺たちが、いまさら気にするような事じゃないんだ。

「すみません。ちょっと、俺たちは……」

どう説明したらいいんだ。他の世界から来たなんて、言えるはずがない。

「とにかく、私たちはこういうのって、初めてなんです」

「……………？」

キヨカがなんとかまとめてくれたが、キッキさんは訝(いぶか)しむように俺たちを見る。

「よければ、どうしてなのか、教えていただけませんか？」

強引にでも、話を聞いた方がいい。

これが蟲(ベステート)の影響によるものかもしれないんだ。だとしたら、この影響が一番強い場所に、蟲(ベステート)がいる可能性が高い。

「わかりました。私がわかる事だけになります……」

「お願いします」

これで、少しは蟲(ベステート)に関する手掛かりを得られるかもしれない。

「あそこで休みましょうか」

並木道の途中にあったベンチを指す。

俺たちは、そのベンチで休んで、キッキさんの話を聞く事にした。ちょうど歩き疲れてきたとこだったし、いいタイミングかもしれない。

「お二人もご存じでしょうが、少し前に夜が明けなくなりました。様々な国の学者が調査をしているようですが、原因はわかっていないようです。ですので、私たちも詳しくはわかりません」

なるほど……。少し前からって事は、やっぱり蟲(ベステート)関係かもしれないな。

「他の国では、陽の光がなくなり、困っているという話も聞きます。ですが、私たちの国では、この状況は歓迎されました」

「歓迎……ですか？ 他の国では困ってるのに？」

「はい」

ずっと夜だったら、色々と支障があるはずだ。困るのが普通なのに、この国は歓迎？

「どういう事なんだろうね。お日様が出ないと、農耕ができないよね。それに、人間って、太陽の光を浴びないと、体が弱くなっちゃうんだよ」

後半は知らなかったし、本当なのかもわからないけど、太陽の光がないと、農作物が育たず、食料に影響してくるはずだ。

「確かに、作物に関しては、いい影響とはいえません。実際、他の国で困っているというのが、その点が大きいようです。ですが、私たちの国では、元々太陽の光を利用せずに育てていましたので、さほど影響はありません」

「それって、すごい技術なんじゃ……」

普段でもそうだろうけど、この状況なら、他の国はその技術を欲しいと思うだろう。

もしかして、あの審査みたいなものも、そのせいなんだろうか。

他の国の進攻を防ぐためだと思えば、あの大きな門も納得できる。

「もしかして、私たちに質問したのも……」

「いいえ、それは違います。あれは、こういう事になる前から、ずっと昔から行われてきました。元々この国は、外からの人に対して、距離をとっていましたので」

「そういえばそうか。あんな大きな門が、すぐに設置できるわけないか」

「そういえばそうだね」

言われて納得する。

「詳しい理由は言えませんが、私たちは元々、陽の光が苦手だったのです。全員が……というわけではないのですが、この国の人々のほとんどがそうでした。ですので、この国は夜に活気づく国だったのです」

太陽の光が苦手……か。そういう人たちもいるんだ。

なんだか、太陽の光が当たり前だったので、なんとなくイメージできない。

「じゃあ、こうなったら……」

「そうです。キヨカさんが思われた通りです。太陽が昇らなくなり、夜が続いているこの状況は、私たちにとって、とても過ごしやすいんです。まさに、理想の国なんです」

……理想の国か。

他の国は困っていても、この人たちには違うんだ。

蟲(ベステート)の影響でこうなってるんだらうけど、それを望んでいる人もいる。

「トールちゃん、なんだか複雑だよ」

「……俺もそう思う」

「ねえ、私たちが蟲(ベステート)を封印しちゃったら……」

「多分、この状況は戻るだろうな」

「だよな。だったら……」

「それは俺も思うけど、やっぱり封印はしないとダメだろ。実際、他の国じゃ困ってるわけだろ」

「だけど……」

キッキさんたちを見ていると、とても幸せそうに見える。

こういう状況になって、この人たちは暮らしやすくなった。

こういう事もあるのか……。

今までは、蟲(ベステート)のせい困っている人たちしか知らなかった。

気付いていない世界もあったし、気にしていない人たちもいたけど、俺たちは蟲(ベステート)が

全ての人たちを困らせるものだと思っていた。

いや、それが当たり前なんだろう。

だけど、この国の人たちは、この状況を幸せだと思っているし、理想の世界だと思っているよ
うだ。

「やっぱり、俺たちは封印しないとイケないと思う」

「それは、私もそう思うけど……。でも、なんだか……」

「この世界全体の問題として考えるべきだと思う」

「それって、大多数のために、少数派は無視するって事だよな」

「……………」

キヨカのやつ、痛いところをついてくるな。

確かに、俺が言っているのはそういう事だ。

この国の人たちを見捨てて、この世界の他の人たちを救うという事だ。

「わかってるよ。私だって、トールちゃんが、そういう事をしたいんじゃないって。だけど……
」

「俺だって、それはわかってる。小さな犠牲を認めるわけじゃない」

「だよな……」

いつもと違う展開に、どうしても気持ちが重くなっていく。

本当なら、蟲(ベステート)に苦しめられている人を救うぞ、とやる気になるはずなのにな……。それが、今回は逆だ。厳密には、苦しめられている人は大勢いる。しかし、目の前にいる人たちは、この状況を望んでいて、理想的だとまで言っている。

どうしてだよ……。

俺たちは、どうしてこんな事で苦しめられるんだ。

「お二人とも、どうかされたんですか？」

深刻そうに―――実際、深刻なんだけど―――話している俺たちを窺うように訊いてくる。案内人としては、さっきの話で気分を害していたら……とでも考えているんだろう。

「いえ、ちょっとこれからどうしようかな……と」

「そうですか」

「どこに行ったらいいかな……って。どこか、観光地っていうか、名所みたいなのってないんですか？」

キヨカは明るく振る舞おうとしてくれる。

「そうですね……。この国は、外部の人をあまり入れませんので、元々観光という分野はないんです」

「でも、宿がありましたよね」

「はい。全くないわけではありませぬので、公営の宿としまして、いくつかございます」

あれって公営だったんだ。確かに、あんな風に国の外の人を入れないんなら、観光で気軽に訪れようという人だっていないだろう。

それなのに、宿を経営するなんて、利益は見込めない。

「そうなんだ……。ないならしょうがないよね」

「でもさ、自分たちとは違う国って、それだけで充分楽しいだろ」

「そうだね。ここの人たちには普通でも、私たちからすれば、珍しいものばっかだもんね」

実際、どの世界でも共通だが、自分が知らないものばかりなので、結構楽しかったりする。

蟲(ベステート)の封印が関係なく、ゆっくりと観光できるなら、こんないい旅はないだろう。だけど、実際にはそうじゃないし、そもそも蟲(ベステート)があつてこそ、この旅をしているわけだ。

「適当に、この辺りでも歩きましょうか」

「そうだね、トールちゃん」

「わかりました」

俺の提案で、この辺をしばらく散策する事にする。

とにかく、蟲(ベステート)をどうするかは後回しだ。結論としては、封印するに決まってるんだけど、やっぱりすっきりしない。こんなもやもやしたまま、ちゃんと封印できるかわからない。迷っていたら、封印できない事だってあるかもしれない。

お互いにそんなもやもやを感じつつ、できるだけ表には出さないように気を配る。もっとも、俺たちのそんな姑息なものなんて、キッキさんには見破られているのかもしれないけど。

周囲が夜なので、なんだか自然と落ち着いた雰囲気になる。どうもはしゃぐという感覚がない。

それは、この国の人たちもそうなのか、元々こういう気質なのかはわからないけど、物静かな印象を受ける。

ただ、入国してすぐにあった屋台の市場はもの凄い賑わいだったので、静かなばかりじゃないんだらう。

「なんだか、変な感じだね」

「そうだな」

空を見上げて、やっぱり夜だ。星が瞬いている。

なのに、時間としては、ちょうど昼頃になるはずだ。

昼夜が逆転しているような気分だけど、時間がおかしいわけじゃない。

「でも、ロマンティックだよ」

「……………そうかもな」

そう言われて、改めて周囲を見ると、確かにそうかもしれないな。

建物はほとんどが煉瓦造りで、道路も石を敷き詰めたものだ。街灯も仄かな明かりで明るすぎない。その薄暗さが、ロマンティックな雰囲気に感じられるのは事実だ。

「夜の散歩っていうのは、女の子の憧れだよ」

本当か？ 俺は聞いた事ないぞ。まあ、俺の場合は、そういうのに疎いってのもあるんだらうけど。

「とにかく、ロマンティックで、いいムードだよ」

「……………まあ、それは認めよう」

だけど、どうしてもロマンティックなムードになりきれない。その原因は——この荷物だ。
トロリーバッグに目をやる。

二人とも、荷物がいっぱいだ。入るだけ詰め込んだって感じで、どこに夜逃げするんだって気分……とまではならないか。リヤカーじゃあるまいし。

でも、気分だけなら、そんなに変わらないかも。

キャストが壊れるんじゃないかと心配になる。

「ねえ、トールちゃん」

「ん？ どうした？」

キヨカが真剣な眼差しを向けてくる。

「そろそろ、お腹空かない？」

「……………」

なにかと思えばそれかよ。

そんな事……と言いたいところだが、

「……そうかもな」

俺もちょっと腹が減ってきたかも。

時間も時間だし、結構歩いてるので、腹が減ってきた。

「キッキさん、トールちゃんがお腹空いたみたいなんですけど、どこか食べる所ってありますか？」

キヨカめ……。俺をだしに使いやがったな。

「そうですね。そろそろ昼食ですね」

「私たち、だいたいのは大丈夫なので、キッキさんにお任せしちゃっていいですか」

「……わかりました。そうですね……………」

この国の料理なんて知らないから、食べたいものを訊かれても答えられないわけだし、キッキさんに任せるのが正解だろう。キッキさんからすれば、結構なプレッシャーかもしれないけど。

キッキさんは、いくつかの候補があるのだろうか、しばらく考えている。

「そうですね。ご案内します」

どうやら決まったようだ。俺たちは、キッキさんに案内されるままについていく。

キッキさんに連れられて到着したのは、どうやらこの国のファストフードの店のようだ。店内で食事もできるようだけど、道路に面してカウンターがあり、そこでテイクアウトもできるらしい。

「屋台はまだ時間がありますので、それに似た雰囲気のお店はいかがでしょう？」

「いいと思います。うっわぁ、他の世界にもこういうお店ってあるんだね」

「そうみたいだな」

世界が違えば、当然文化や習慣も違うはずなのに、こういう発想は似てるんだろうか。

カウンターには、エプロンをした女の人立っている。

メニュー表がカウンターの台に写真付きであったので、それを見てどういう料理かを想像する

。

「ここって、持ち帰りできるんですね」

「はい。もちろん、店内で食べる事もできます」

「どうする？」

「愚問だよ、トールちゃん。お外で食べるの美味しいよ」

「だな」

確かに愚問だ。

できれば個人的には、晴れた空の下で……ってのがいいんだけど、今も晴れてるといえばそうだし、夜空の下でっていうのもオツなものかもしれない。

「じゃあ、持ち帰り」

「ご注文をどうぞ」

「そうだね……」

「そうだな……」

俺たちはメニュー表を見る。

メニューは結構充実しているようで、ハンバーグのようなものや、唐揚げのようなもの、スープやサラダ、ハンバーガーやホットドッグのようなもの、サンドウィッチのようなもの、はたまた麺類まである。さながら、普通のレストランだ。

「ケーキもあるよ」

「本当だ」

さすがにアイスのようなものはないにしろ、ケーキまである。

「どれにしようか、迷っちゃうね」

どれもこれも美味しそうで、なかなか決める事ができない。メニューが多いのって、それはそれで困るよな。贅沢な悩みなんだろうけど。

「キッキさんのおすすめってありますか？」

なかなか決められないので、キヨカがそんな質問をする。この国の人の意見や、おすすめするのは参考になる。時間や胃袋に余裕があれば、全部食べたいくらいだからな。

「そうですね……。こちらとこちらは、私は好きです」

そう言って指したのは、この国のトマトがふんだんに使われたサラダと、ハンバーガーのようなものだった。

「なるほど……。確かに美味しそう」

外で食べるなら、これはありな組み合わせだろう。キッキさんの事だから、その辺も考慮してそんな気がする。

「トールちゃんはなににする？」

「俺か……。まだ決められない」

「優柔不断だね」

「そういうお前はどうかだよ」

「トールちゃんを選んだのとは、違うのにしようって決めたよ」

「……なんだ、それ」

俺を選んだもの以外ってのは、なにかの当てつけなのか？

「だって、一緒のものだったら、つままないじゃない。違うものだったら、ちょっと分けて食べると、色んなものが食べれるじゃない」

なるほど、そういう事ね。

色々なものを食べてみたいってのはわかる。

でも、それって……。

「結局、お前も決まってるんじゃないか」

「そんな事ないよ。私は決めてるもん」

「俺を選んだもの以外ってのは、決めたって言わないだろ」

「しょうがないじゃん、どれも美味しそうなんだもん」

逆ギレ？

「トールちゃんだって決められないでしょ。棚上げよくないよ」

「そっくり、その言葉を返す」

そんな俺たちを見て、キッキさんがくすくすと笑う。それを見て、店員さんも笑っている。

うわっ、なんだかこの展開、前にもあったような……。しかも、つい最近。

「すみません。本当に仲がよろしいんですね」

はう……とキヨカは顔を真っ赤にする。

やれやれ。

俺も恥ずかしくなってくる。

「トールちゃん、早く決めようよ」

「そうだな。同感だ」

なんとか、この空気から逃げたい。

俺たちは、これとこれとこれ……という感じで、急いで注文した。

それぞれ注文したものが入っている紙袋を持って、近くの広場にやってきた。

芝生が敷き詰められているので、そのまま座る事ができる。

そこに座って空を見上げると……、

「すごいね……」

「ああ」

満天の星だった。

国の中の道は、ほとんど街路樹で空が覆われていたので、これほど見晴らしのいい場所は開放的な気分になる。

「なんだか、変な感じだね」

「そうだな」

空は夜だが、実際は真っ昼間だ。本当なら、太陽が昇っているはずだ。

青空の下、こうしてピクニック気分……なんだろうけど、今は星空だ。

「でも、これはこれでいい感じだよ」

「確かに。夜にピクニックってなかなかしないもんな」

「夜のピクニックだね」

「なんだか、不思議な感じだな」

夜のピクニックって、ちょっと変な響きだな。でも、なんだかロマンティックで、ドラマが起こりそうな気がする。

「早速食べよう」

そう言いながら、キヨカは既に紙袋から、中の料理を取り出している。

「俺も食べるか」

キッキさんも、丁寧に料理を出している。

星空の下のピクニックの始まりだ。

「いい匂いだよ……」

「キヨカはなににしたんだ？」

俺たちは、ほとんど勢いで注文したので、お互いになにを注文したのか覚えていない。

「私はね……これだよ」

キヨカが器に入ったものを見せてくれる。どうやら、グラタンかラザニアのようなものだろうか。

「旨そうだな」

とってもいい香りがする。

「でしょ。とろっと溶けたチーズがいい感じなの」

「確かに」

「でしょでしょ。ラザニアっぽい感じなのかな。トマトリゾットみたいな感じなのかな。………
…とにかく、そんな感じだよね」

「ああ」

俺たちが知っている料理だと、その辺だろうな。

「それと、やっぱり乙女はビタミンと食物繊維だよ」

どうやら、キヨカはサラダも注文していたらしい。コールスローのような感じだ。

「トールちゃんは何ににしたの？」

「俺か？ 俺はな……」

紙袋からそれを取り出す。

「ハンバーガー？」

「……まあ、そうだな」

結局、俺が選んだのはハンバーガーだった。

パンズに、肉、チーズ、トマト、肉、チーズ、トマト……が挟んである。

それと、定番のフライドポテトとのセットだ。

「キッキさんはなににしたんですか？」

「俺も気になります」

やっぱり、地元の人がなにを好むのかってのは、注目するところだろう。

「私ですか？ 私はこれです」

そう言って見せてくれたのは……、

「サンドウィッチだね」

「そうだな」

それは、どう見てもサンドウィッチだった。

「中はなんですか？」

「これです」

「うわぁ」

中には、スライスされたトマトがぎっしり。

どこまでも、この国の人たちはトマトなんだな……と思う。

それに加えてもう一品、トマトのサラダも注文していたらしい。

まさにトマトづくしだ。

ちなみに、俺たちは三人とも、飲み物にトマトサイダーなるものを注文していた。

「トマト三昧だね」

「そうだな」

どの料理にもトマトが使われている。

確かにこの国のトマトは美味しいんだけど、あまりにトマトだらけすぎないか？ それだけ、この国の人が好きだって事なんだろうけど。

それもあって、レシピも多いというか……むしろ、なんにでも入れてるって感じがするな。

「じゃあ、いっただっきまあす」

手を合わせると、キヨカはパクパクと食べ始める。

「いただきます」

俺もハンバーガーにかぶりつく。

キッキさんは、手を重ねてお祈りをするようにしてから、サンドウィッチを食べる。

なんだか、それぞれだな……と思いながら、それぞれの料理に舌鼓を打つ。

それにしても、やっぱり星空の下ってのは不思議だ。

なんだか、夜に抜け出して、こっそりピクニックをしてるんじゃないかって思えてくる。

「美味しいよ、トールちゃん」

「そうだな」

「じゃあ、ちょっとちょうだい」

そう言うなり、キヨカがかぶりついてくる。

「お、おい……」

「……ん、んぐんぐ。………美味しいね」

「お前な……」

「トマトがさっぱりしてるし、お肉もジューシーだね」

「いきなりなんだよ」

「はい、トールちゃん」

「んがっ」

と、いきなり口にスプーンが突っ込まれる。

「んぐっ」

なんだよ……と思ったら、キヨカが食べている料理のようだ。

「……んぐんぐ。………あっ、なんだ、これ……旨い」

トマトの酸味がきいたご飯とチーズが見事にマッチしている。とろっとしたチーズだが、少し焼き目が入っているらしく、程良い香ばしさもあったりする。カットされたトマトも具として入っているらしく、きちんと食感もある。それがまたジューシーで、程良い酸味と甘みがある。

「どう？」

「旨い」

もう、それしか言葉はない。

テイクアウトのファストフードだと思っていたら、とんでもない料理だ。この世界、なかなか侮れない。っていうか、トマトだらけってのは……まあ、俺は好きだからいいんだけど。トマトが苦手な人だったらどうなんだろうな。まあ、俺たちが知ってるトマトとは、味も舌触りも違うから、そうと知らなければ、食べられそうな気もする。

「トールちゃん、この国にずっといたいくらいだね」

「………いやいや、俺たちの旅は……」

「わかってるよおだ。そのくらい素敵だねって事だよ。わかんないかな」

「わかってるっての」

そんなの当然だろ。俺だって、そうじゃなきゃこの国にずっといたいって思えたくらいだしな

。

まだ、一日も経ってないんだぞ。それなのにそう思わせるのは、この国の料理が俺たちの胃袋をがっちり掴んでしまったからだろう。やっぱ、人間って胃袋を支配されると弱いのかな。

それから、俺たちは黙々と料理を食べた。といっても、あまりに美味しくて、あっという間に平らげてしまったんだが。

同じような煉瓦でできた大きな建物が並んでいる。そのどれもが似ていて違いがわからないので、ここで案内がなくなったら迷子になる自信がある。

その建物のどれもがアパートのようになっているようで、窓からはそれぞれに生活感がある。この建物には、それぞれの家族が住んでいるんだろう。

食事を終えて、俺たちはキッキさんに案内されて、この国の人たちが多く住む場所に連れてきてもらった。まあ、住宅街ってところか。

せっくなので、繁華街以外にも、この国の人たちを直接知れるような所を希望したのだ。

キッキさんも最初は戸惑っていたが、なんとかこうして連れてきてもらう事ができた。

よく考えれば、この国の人たちは、外から来た人たちを拒む傾向にあるとか、どっちかっていうと苦手になっているような事を聞いたのを、今になって思い出した。

そりゃ、キッキさんが戸惑うのはもっともだ。俺たちをここに案内して、この国の人たちに不快な思いをさせるかもしれないんだからな。

それでも、こうして案内してくれたわけだし、俺たちは最大限に、迷惑が掛からないように気をつけないといけないわけだ。

「トールちゃん、ちょっとびっくりだね」

小声で話し掛けられて、一瞬なにかわからなかった。

「……そうだな」

「なんだか、キッキさんに悪い事をしちゃったかな……」

「そうかもしれないな」

「でも、私もさっきまで忘れちゃってたんだよね」

「キヨカもか」

「やっぱりトールちゃんもなんだ。そうだよ、覚えてたら、止めるよね、普通は」

「当たり前だ」

「お互いに忘れちゃってたなんて、なんだか変な感じというか、ちょっと嬉しい感じかな」

「はあ？」

「だって、私とトールちゃんがシンクロしてたって事でしょ」

「なんだ、それ」

「トールちゃん、シンクロ知らないの？」

「それくらい知ってる」

「なあんだ。でも、本当かなあ？」

「……………はあ」

「ありゃりゃ」

「どうかされましたか？」

俺たちが小声で話してたら、そりゃ気になって訊いてくるよな。

「いえ、なんでもないです」

「そうです。トールちゃんが莫迦だってだけです」

「なんだ、それ」

「本当にお二人って仲がよろしいですね」

キッキさんはくすくすと笑う。

ああ……もう何回目だろう。俺たちって、そういう風に見えるのか？ まあ、確かに仲が悪いわけじゃない。むしろいい方だろうな。だけど、なんだかそういう関係じゃないっていうか……。まあ、深く考えないようにしよう。

「それにしても、同じような建物ばかりですけど、迷ったりしないんですか？」

なんとなく空気を変えようとした質問だったが、我ながらこれまた微妙だな。

「そうですね……。初めての方には区別しづらいのかもしれませんが。ですが、私たちはそういう事はありません」

「当たり前じゃない、トールちゃん。なに言ってるのよ」

「いや、なんとなくだな……」

俺だって、変な質問だったって思ってるっての。なんとなくなんだよ。

「ですが、こういう風になっているのは、意図的なんです」

「意図的……？」

「はい。外部からの人が苦手という事はお話ししましたよね」

「「……………はい」」

俺たちは同時に頷く。それにしても、今のキッキさんは、今までとはどこか違う空気を纏っていた。

「すみません。私たち、さっきまでその事を忘れてて……それで、こんな場所に行きたいって…
…特になにも考えてなかったというか……」

その空気に向けてなのか、キヨカが珍しく言い訳をする。

「そうでしたか。そんな気はしていました。あなた方でしたら、こういう事をわざとしないだろうと。そう思ったからこそ、ここにお連れしたわけですし」

「本当にすみませんでした」

俺も深々と頭を下げる。

「いえいえ、ここにご案内したのは私です。私が決めたのですから、あなた方が後ろめたく思われる事はありません」

「でも……」

「もう、気になさらないで下さい」

「「……………」」

俺たちは、もうなにも言えなかった。

確かに、キッキさんが無理だと言えば、俺たちはここに来る事はできなかった。この国の中にある限り、キッキさんの承諾なしには移動できないようなものだ。

やっぱり、この人はただの案内じゃない。俺たちの監視をしてるんだ。

そう思わせるなにかがある。

そう考えると、この国にはそうしなければならない理由があるんだ。それが、この国が外部からの訪問を快く思わない理由なんだ。

その事を率直に訊いてみたい。知りたい。気になる。

だけど、それはできない。

それをすれば、きっと俺たちはこの国にいられなくなるだろう。

蟲(ベステート)を発見できていない状況でそれはできない。

「私たちは、外部からの人を基本的に拒絶しています。それでも、やはり侵入してくる者たちがいたのです」

キッキさんが訥々と続きを話し始める。

「その者たちが、特定の誰かを見つけられないように――」

「ここから出ていけないように――そうしたんですね」

キヨカが言葉を引き継ぐ。

「――はい」

なるほど。一種のカムフラージュなのか。迷宮を作る事で、自分が襲われるリスクを減らし、脱出に時間を掛けさせる事で、救出のチャンスを作る。

確かに納得できる理由ではある。

だけど、つまりこの国はどこかから狙われているって事じゃないのか？

それも、物じゃなくて人が狙われている。いったいなにがあるんだ？ 気になるけど、答えてくれるわけないよな。俺たちだって、完全に信用されてるわけでもないだろうし。

別にこれに関しては、キッキさんを責めるような事じゃない。どうしようもない……っていうものだろう。

しかし、この国を知るに、なんだか物騒な所に思えてくる。でも、この国は素敵だと思う。主に食事面で。

どことなく重い空気のまま、住宅が並ぶ中を歩いていく。やっぱり、俺たちにはどこをどう歩いてきたのかわからない。

このまま、ここに放置されたら、俺たちは戻れるんだろうか？

まあ、歩いていけば、どこかに着くんだろうけど、どのくらい掛かるだろうね。

なにせ、真っ直ぐな道じゃないんだよな。いい感じにくねくねしてて、周囲の建物は同じにしが見えないから、曲がり角を曲がってしまうと、もうわからなくなる。

「トールちゃん、なんだかこんな童話なかったっけ？」

「はあ？ 童話？」

「うん、童話だよ。兄妹が森の中に入って行って、道に迷っちゃう話」

「どんなだよ」

いったいなんの話なんだ？ 森の中で迷子？ よくありそうな感じだぞ。

「それで、迷ってどうなるんだ？」

「えっとね……魔女に殺されそうになって、やっつけて逃げちゃうの」

「よくわからん」

魔女？ やっつける？

海外の童話だと、よくありそうな感じじゃないか？

「それだけでわかるかよ」

「うう～、気になっちゃうよ。ど忘れだよ」

キヨカは頭を抱えて唸っている。

「まあ、頑張ってる思い出せ」

「薄情だよ～」

「知らん」

突然なにを言い出すんだ、こいつは。しかもわけわからん。

でも、ちょっとは気が紛れたかも。もしかして、キヨカは……。いやいや、そこまで考えてるわけないだろ。

「ここを抜ければ、役場などの公共機関がございます」

んっ？ 今、さらっと重要な事を言ったよな。

「あの……。そんな事、私たちに教えちゃっていいんですか？」

「俺たち、外部の人間ですよ」

そんな重要な場所、俺たちのような外部の人間に教えていいもんじゃないだろう。公共機関がある場所なんて、格好のターゲットだろう。

もしかして、ブラフか……と思ったけど、到着してみると、実際にそれらしい建物が並んでいる。

「おいおい、マジかよ」

「びっくりだね」

俺たちは、この状況に驚愕していた。

確かに国内の案内を頼んだけど、まさかこんな中枢機関のような場所まで案内してもらえとは思わなかった。普通は観光地……って、この国にはないとしても、景勝地とか、繁華街くらいだと思ってたからな……。

俺たちとしては、隅々まで知っていた方が好都合かもしれないから、ありがたいといえありがたいんだけど。

「それほど広い国ではありませんので、これで半分くらいでしょうか。残りはこういった住宅地です」

どうやら本当にそうみたいだ。

少し拓けた場所だと遠くまで見えるのだが、遠くには必ず岩壁が見える。崖に囲まれているようだ。そのお蔭で、国土の広さが推察できる。

「トールちゃん、他の場所も……だね」

「そっか」

どうやら……というか、わかっていたんだが、今までの所では、蟲(ベステート)の反応はなかったようだ。

「この国なのは確かだよな」

「うん、この辺だって」

周囲は崖だし、多分この国だろうな。だとしたら、残りの住宅街か。

「でもさ、今日は疲れちゃったから、戻ろうよ」

「そうだな。なんだかんだで歩き通したもんな」

「それでは、戻りましょうか」

というわけで、俺たちは昨日泊まった宿まで戻る事にした……………のだが、宿には行かずに、
「屋台に行こ〜」

というキヨカの号令の元、俺たちは屋台に向かう事にした。キッキさんに訊いたところ、着く頃には開店している時間になるそうだ。

それを聞いた瞬間のキヨカは、テンションマックスだった。

しかし、それはまだまだ序の口だったらしい。それは、屋台に到着してわかった。

屋台では、あらゆるものを食べた気がする。

そのほとんどにトマトが使われているので、たまに使われていないものを見つけると、なんだか不思議に思えた。

まだ一日くらいしか経ってないのに、すっかりこの国の風習に慣れてしまっているようだ。

「さすがにもう食べれないよ……」

キヨカはこの屋台を堪能できたらしい。お腹をさすりながら戻ってきた。

「どうやら、楽しんでいただけみたいですね」

キッキさんも嬉しそうだ。

それにしても、こいつは食べ過ぎだと思う。俺よりも食べてるんじゃないか？

「大丈夫か？ 食べ過ぎて、気分が悪くなくても知らないぞ」

「なんだよ、それ。おじいちゃんみたい」

「……………」

普通は、お母さんみたいとでも言うんだらうけど、こいつはじいさんと一緒にいる事が多かったからだろうな。きっとそうだ。それ以外の意味はないと思う。そう信じたい。

「でもさ、まだまだ制覇までは遠いね」

「そりゃそうだろう。二人で分担しても難しいだろ」

「分担なんかしたら、半分近くは食べてない事になるじゃない。ちゃんと、自分の舌で味わって、自分の胃袋に詰め込まないと」

「……………」

なんだその表現は。

「でもまあ、確かにそうだな。やっぱり、自分で食べたいよな」

キヨカは結構あちこちの屋台に行っていたみたいだけど、俺は順番に屋台を見て、気になったものを食べていた。

なので、ほとんどの屋台を見ていない。もしかしたら、掘り出し物の屋台があるのかもしれない。

「また明日も来ようね」

「そうだな」

「それでは、今日は宿に戻りましょうか」

俺たちは、宿に戻って休む事にした。

歩いている時は気にならなかったが、やっぱり歩き通しだったので足が痛くなっていた。

部屋に戻ると、それぞれ風呂に浸かって、すぐにぐっすり眠ってしまった。

なんだか食べてばっかだった気がするな.....。

翌朝は、なんだか体が痛かった。どうやら筋肉痛らしい。

今まで、旅をしてうろうろする事もあったのに、今回に限ってどうした事だろう。

痛み上がりだったってのもあるのかもしれないけど、この程度でこんな状態になるなんて……

。

「ああ、トールちゃん、今日はなんだかしんどいよ」

どうやら、キヨカもそうらしい。

「俺もだ。足が特に痛い」

「私もだよ。いっぱい歩いたからかな？」

「どうだろうな」

「そうだよ、きっと」

「でも、今までこんな事なかったろ？」

「そうだね……。きっと、その前まで、ずっと眠ってたからじゃないかな」

「なるほど……」

それもあるのかもしれないな。ここに来る前は、ずっと体調を崩して眠ってたからな。それがどのくらいかわからないけど、体が弱っていたのは事実だ。

それを考えれば、久しぶりに歩いたせいなのかもしれないな。

「だけどさ……」

仮にそうだとしても、歩くのすら難しいのは問題だ。まだ蟲(ベステート)の手掛かりがない。かといって、こんな時に見つかっても問題だ。

どうしたらいいんだろうな。

そんな事をぼやこうものなら、自己管理がなってない、と怒鳴られるんだろうな。

「今日は、このまま休もうか」

「その方がいいかもしれないな」

無理をしてもしょうがないし、そんな事をすれば、いざという時に対処できないと困る。

ここは、思い切って休もう。

「じゃあ、キッキさんに言っとかないとだな」

「トールちゃん、お願いね」

「やっぱ俺か」

よっころしょっとベッドから出る。

「うっ……」

立った瞬間、座り込みたくなる。足が痺れてるといっつか、体に力が入らない。

車椅子とかないのかな……。乗った事はないけど、あれなら移動が楽そうだよな。

だけど、残念ながらそういうものはない。しょうがないので、壁づたいに歩いていく。

うっ……。

それでもやっぱり、少し歩く毎に休憩をしないと歩けない。

こんなに弱ってるのか。

ゆっくりと歩いて、どのくらい時間を掛けたかわからない。

フロントが見えた時は、本当に嬉しかった。なんとかここまで来れたんだ。長い道のりだった

。

「すみません」

壁にもたれ掛かるようにしながら、声を掛けると、何かとカウンターから出てきてくれた。

「どうなさいました？」

「すみません。ちょっと体調が優れなくて……」

「すぐに医者呼びましょう」

すぐにカウンターに戻ろうとするので、その背中に言う。

「いえ、それは大丈夫です。ただ、疲れが溜まってただけですから。今日一日休めば大丈夫です」

「しかし……」

「本当に大丈夫ですから。……なので、キッキさんに、今日の案内は必要ないとだけ伝えてくれませんか」

「本当に大丈夫ですか？」

「はい。それじゃ、お願いします」

正直なところ、こうしているのもつらい。すぐにでも横になりたい。

言うだけの事は言ったし、早く戻ろう。

といっても、戻るのも一苦労なんだけど。

えっちらおっちらと、来た道に戻っていく。

足がガクガクで力が入らない。

「お手伝いしましょう」

倒れそうになりながら歩いていると、宿の人が肩を貸してくれた。

「ありがとうございます」

「いえいえ。本当に、医者はよろしいのですか？」

「ええ。筋肉痛ですから」

はははっ、と乾いた笑いが出る。笑顔を作るだけの力もない。

ほとんど動けなかったが、宿の人のお蔭でなんとか部屋に戻ってきたら、キヨカは既に熟睡してやがった。

なんだかムカつくな。

「本当にありがとうございました」

お礼を言って、俺もベッドに横になる。

ああ、やっと休める。

別に眠いわけじゃないんだが、すぐに眠りについてしまった。

がばっと目を開けると、目の間には女の人の顔があった。

「起こしてしまいましたか？」

ぼんやりとしたまま、その人の顔を見る。

「……………あれ？ ……………俺」

眠っていたのは間違いないようだ。

「……………キッキさん？」

目の前にいたのは、キッキさんだった。

隣のベッドを見ると、キヨカがすびすびと寝息をたてている。

キッキさんは、俺たちのベッドの脇に、椅子を持ってきて座っているようだ。

「あの……どうしてここに？」

状況が整理できない。

キッキさんがどうしてここにいるんだろう？

「お二人が倒れられたと聞きましたので、看病をさせていただこうと思ったのですが……お二人とも、ぐっすりとお休みになられていたので、失礼ながらこうして様子を見ておりました」

「そう……ですか」

つまり、俺たちはキッキさんに寝顔を見られまくっていた……と。

「ありがとうございます。でも、俺たちなら大丈夫ですよ」

「そうですか？」

なんだろう？ なにか納得していないというか、なにかを気にしているような感じがする。俺の思い過ごしだろうか？

「あの……なにかあるんですか？」

「いえ、お二人が大丈夫だと仰るなら、それでいいのですが……」

なんだ？ やっぱり、なにかあるような感じだな。

「本当に、なにかあるんですか？」

「……………いえ、何度かお話ししています、あなた方によく似た旅の方も、この国に来て倒れられたらしいので……」

「……………偶然だと、思いますよ」

本当にそんな事があったのか。わざわざ嘘を言う必要はないし、本当の話なんだろう。

「もしかして、俺たちがこの国に来て……というか、この国のせいで体調を崩したと思ってるんですか？」

おそらくそういう事なんだろう。

この国の雰囲気なのか、生活に関するなにかなのか、食べ物なのか——なにかはわからないけど、俺たちの体に異変をもたらした。その結果、体調を崩した。そう考えてるのか。

「……………はい。似たような時期に、似たような方が、似たような症状になられたので……」

なるほど。そう考えても不思議じゃないか。俺だって、もしかしたらそう考えるかもしれない。

元々、外部からの人が少ない国なので、この国のなにかが合わないのかもしれない……なんて考えるのは、至極当然か。

「大丈夫ですよ。別にこの国のせいじゃないです。俺たちは、少し前まで体調を崩して寝込んでたんです。それで、ある程度よくなって、この国に来たんです。そんな病み上がりの状態で、色々としたものだから、ちょっと疲れが出たというか……。まあ、そんな感じなので、一日休めば大丈夫です」

「……そうですか。そう仰っていただけるのでしたら、それでいいのですが……」

「別に、本当の事ですから」

病み上がりで国中を歩き回れば、疲れだって出るだろう。そもそも、今までの旅で溜まった疲れもあるし。

きっと、その俺たちに似た旅の人も、長旅の疲れが出ただけだと思うんだけどな……。

「わかりました。ですが、もしなにかありましたら、遠慮なく仰って下さい」

「ありがとうございます」

「それでは、失礼します」

キッキさんが頭を下げ、椅子を元の場所に片付けると、部屋を出ていった。

「とにかく、もう一回寝るか」

一度起きてしまったので、眠気はあまりないんだけど、休息も立派な修行だ。無理にでも休んでおかないと。完全に回復していないと、蟲(ベステート)が出現した時になにもできない。

目を閉じて、もう一度眠る事にした。

「————お腹空いたよ。トールちゃん、お腹空いたよ」

ゆさゆさと体を揺すられる。

「——んだよ、もう……」

せっかくぐっすり眠ってたのに……。

「起きてよ、トールちゃん」

どうやら、キヨカが揺すっているらしい。

「なんだよ」

「お腹空いた」

ぐいっと顔を寄せてくる。

「おわっ」

思わずのけぞってしまう。

「お前、ちょっと顔近すぎ」

「お腹空いた」

「……………」

なんとかのひとつ覚えみたいだぞ。

でもまあ……。

自分のお腹に手を当てる。

「そうだな」

さすがに腹の虫は鳴らないまでも、腹が減ってるのは事実だ。寝てただけでも、やっぱり腹は

減るようだ。

「じゃあ、食べに行くか」

「うん」

すげえいい笑顔だ。

俺は体を起こしベッドから出る。

軽く体をほぐしてみるが、どこも痛い箇所はなかった。

それを確認して、簡単にストレッチをしておく。

「トールちゃん、早く行こうよ」

「待って。ちゃんと体をほぐしておかないと――」

「いっぱい食べれないよね」

「違う」

.....いや、それもあるかもしれないけど、そうじゃなくてだな。

「また、筋肉痛になったらどうするんだよ。あんまり寝てばっかいられないんだぞ」

「.....わかってるよ。ちゃんとしたもんね」

「そうなのか」

「当たり前だよ。お寝坊さんのトールちゃんと違って、私は少し前に起きてましたから。ちゃんと、柔軟とかしたんだからね」

えっへんと胸を張って自慢そうに言う。

.....俺より早く起きたくらいでなんだってんだ？ つうか、俺は途中で何度か目を覚ましてるからな.....。

「わかったよ。とにかく、ちょっとだけ待ってくれよ」

「しょうがないな。三秒だけ待ってあげるね。はい、終了」

「.....」

なんだ、今のは。

「おい、数える前に終わってなかったか？」

「言い始めてから、三秒は経ってたよ」

なんという理屈だ。

話し終える頃には、時間が過ぎているってか。卑怯にも程があるだろ。屁理屈かもしれないが、言い返せる自信がないので、結局は受け入れるしかない。理不尽だ。そして、不条理だ。暴君だ。横暴だ。.....などと思っても、口にするだけ無駄だろう。

だが、なにかしらは言わないと気が済まない。

「そんなのありか？」

それが精一杯だった。チキンだな、俺。

「ありだよ。ほら、早く行こうよ。お腹が空きすぎて、お腹と背中がくっついちゃうでしょ」

「.....なんか、そんな歌があったような気が.....」

「どうでもいいから、早く行こうよ」

ぐいぐいと手を引っ張ってくる。

「俺はまだストレッチ中なんだよ」

腕を引っ張られると、体全体が伸びるようで、これはこれで気持ちいいな。

「早く立て！ 他の所は勃てなくていいから、立ち上がれ」

「……………なんだか、ものすごい下ネタを言われた気がするんだが」

「気のせいだよ」

しれっと空惚ける。

気のせいとは思えないんだけどな。

「ほら、早く行くよ」

「わかった。わかったっての……」

キヨカに急かされ、部屋を出てどこかに食べに行く事になった。

フロントに行くと、そこにはキッキさんの姿があった。

「お目覚めですか。体調はもうよろしいんですか」

「はい、なんとか」

そんなやり取りを見て、キヨカはなんだか不思議そうだ。

「キッキさん、私たちの事ちゃんと知ってるんだ」

「ああ、見舞いに来てくれたりもしたぞ」

「.....私、知らない」

「だろうな。お前はすびすびと寝てたからな」

「.....ちょっと待って。もしかして私、寝顔を見られたりしたの？」

「そうだな」

キッキさんは、しばらく俺たちの横にいたみたいだからな。寝顔くらい見てるだろう。実際、俺が目を開けた時、目が合ったくらいだしな。

俺もそうなんだし、キヨカも同じだろう。

「えっ、ちょっと待って。寝顔って.....ええっ？ 私、どんな顔を.....。涎とか.....白目だったり.....。うわあ、どうしよう」

キヨカが一人でパニックってる。

「どうしたんだ、急に」

「どうしたって、寝顔を見られたんだよ。大変じゃない」

「大変？」

なにがだ？ まあ、確かに恥ずかしいだろうけど、そこまで慌てるような事か？

「寝顔なんて、人に見せられるものじゃないよ。そんなのを、見られたなんて.....恥ずかしすぎるよ」

俺にはそれほどでもなくても、キヨカにはここまでパニックするような事らしい。

「キッキさんは、俺たちを心配してくれてだな.....」

「それはわかってるよ。でも、それとこれは別だよ」

「そういうものか？」

「そういうものだよ。寝顔を見られるのは、裸を見られるよりも.....ごめん、同じくらいは恥ずかしいんだよ」

テンションのあまり、勢い任せに言い過ぎたらしく、静かに訂正する。

「とにかく、それくらい恥ずかしいの」

「まあ、わからんでもないけどさ」

「わかってないね。トールちゃんには、この繊細で機微な気持ちはわからないよ」

ズビシッと俺を指す。

確かに、俺には乙女心ってのはわからないさ。そういうのは疎い。鈍感だ。それは自覚している。

だから、キヨカの気持ちをわかってやる事はできないかもしれないが、大雑把でもわかってや
ってるつもりなんだけどな。

それでも、まだまだ不満らしい。

つうか、男なんてそんなものじゃないのか？ 異性の気持ちなんて、わかるものじゃないだろ
。それはお互い様だと思うぜ。男はそれで騒がないだけだ。

キヨカはまだ、うう～っと唸っている。

「もう、忘れようぜ」

ポンと肩を叩く。

「……無理だよお。……でも、見られたのがキッキさんでまだよかったかも。男の人だっ
たら、絶対に立ち直れないよね」

なんだかわからんが、とにかく前向きに考えられるようになってきたようだ。

「ほら、腹ごしらえするんだろ」

その言葉が起爆剤だったらしい。

キヨカの顔が一瞬で変わった。

落ち込んでいた様子は微塵もない。

色彩がなかった目は、一気に輝きだした。

「ご飯だよ、ご飯。……って、今ってなにご飯なんだろう？」

「さあ？ でも、どうでもいいだろ」

ずっと夜のようなので、外を見てもわからない。

一度目を覚ました時間がわからないので、参考にならない。

「よくないよ。朝ご飯かお昼ご飯か晩ご飯かで、なんとなく気分は違うんだよ」

「……なにが違うんだよ。同じように食べてないか？」

「だから、気分の問題だよ」

「……はあ～」

なんだ、それは。

結局、どの時間帯でも食べるものを変えるつもりはないんだろう。だったらいつでもいいじゃ
ないか、と思う。

「そうだな……。さっき起きたし、朝ご飯って事にしよう」

どうやら、キヨカの中で結論が出たらしい。

「勝手にしろ」

非常にどうでもいい。

「キッキさん、お待たせしました。ご飯に行きましょう」

キヨカが、すたたたと駆け寄る。

あの苦悩ややり取りを、キッキさんは全部見ていたのはどうでもいいのか。

それを言うと、また面倒な事になるので言わないでおこう。気付かなければ、それはなかった
事と同じだ。余計な事をして、無駄に疲れたくない。

「今日も荷物を持って行かれるんですか？」

キッキさんが、俺たちの荷物を見る。

「はい。やっぱり、ずっと持っていないと……」

「ですが、この国は安全ですので、責任を持って宿でお預かりしますよ」

「はい。こちらで確実にお預かりいたします」

「トールちゃん……」

キヨカが俺を見る。

「えっと……」

どうしたものか。

この国の人たちを信用していないわけじゃない。完全には信用しちゃいけないんだろうけど、どこかで信用したいと思っている。だから、ここで断ると、この国の人たちを裏切るような事になりそうな気がする。

「俺たち、他の国の宿で盗難に遭いまして、それでずっとこうして持つようになったんです」

「それは災難な事で……。ですが、ここは安全です。そういう輩はおりませんので、ご安心下さい」

まあ、普通はそう言うよな。物騒だと吹聴する国はあまりない。

「それはわかってるんですけど、旅の習慣といいますか……やっぱり、これが一番落ち着くというか、安心できるんです。なにかがあっても、自分の責任ですから」

そう——なにかがあった時、誰かのせいになくていい。任せてしまった自分に責任があったとしても、やっぱり誰かを責めてしまう。

だけど、自分で管理していれば、そういう事はない。だから安心なんだ。

「そうですか……。こちらとしても無理強いはできませんが、ただ屋台の方へ行くとなりますと、おそらくその荷物では身動きがとれないかと……」

「屋台を廻れないの？ でも、昨日は……」

「今日はこの時間ですし、おそらく難しいと思います」

「そんなぁ……。どうしよう、トールちゃん。屋台はちゃんと廻りたいよ」

「そうだな……」

俺だって、屋台をがつつり廻りたい。

そのためには、荷物は少ない方がいい。当然だな。

荷物の安全を取るか、屋台での食事を取るか……。

本当なら、悩む必要なんてないんだろうな。

「キヨカ、ここはこの国の人たちを信用しようよ」

「……元々、疑ってないけどね」

「確かに」

「じゃあ、そうしようか。貴重品だけ、持って行けばいいよね」

「そうしよう。じゃあ、荷物をお願いしてもいいですか？」

「お任せ下さい」

俺たちの言葉を待っていたように、宿の人は荷物を回収する。そして、フロントの奥にある部

屋に持って行く。

「この中に、金庫がございます。どうぞ、中に入って確認して下さい」

俺たちは、そう言われるまま中に入る。

しかし、そこには誰もいない。

「こちらへどうぞ」

声の方を見ると、もうひとつ扉があった。その扉には、丈夫そうな鍵がついている。

今度は、その部屋に入る。すると、中にはロッカーのようなものがいくつもあった。

「やはり、あなた方のように、長い間旅をされていると、自分の荷物の安全を気にされる方が多いんです。そこで、我々はこうして安心していただけるように、身軽な状態でこの国を楽しんでいただけるように、これを設置したのです」

自慢げにロッカーを指す。

確かに、しっかりとしたロッカーで、そもそも、ロッカーのある部屋も金庫のように、しっかりと鍵が掛かるようになっている。

「これなら安心だね」

「そうだな」

元々いない泥棒だって、この中に入ろうとはしないだろう。

ただ、逆に考えると、ここには貴重なものがあるとわかっているわけだから、なんとかしようとも思うかもしれない――なんてのは、穿った見方だよな。

そんなこんなありつつ、俺たちは荷物を預ける事にした。ただ、貴重品は小さな鞆に入れて持ち歩く。もちろん、俺は風伯も持っている。これだけは、肌身離さず持っていないとな。

「それでは、屋台に行きましょうか」

「はい」

そういえば、時間帯としては夜みたいだな。確か、屋台は夕方からだったはずだ。さっきは、荷物がどうのこうので意識してなかったからな……。

「トールちゃん、行くよ」

「ああ」

屋台って考えるだけで、涎が……。こころなしか、胃の動きも活発になってきた気がする。

「おいてくよ」

「わかってるって」

屋台に到着すると、そこは既に人が大勢いた。昨日も多かったのだが、それよりも多い。

どうやら、昨日は屋台が始まってすぐの頃だったので、まだそれほど人がいなかったようだ。それでも、結構な人だったんだがな。

今日は、少し遅い時間帯なので、この有様らしい。

「動けないよ……」

人がぎゅうぎゅうで、思うように動けない。

しかし、それはどうやら俺たちだけのようで、キッキさんをはじめこの国の人たちは、特に不

自由している様子はない。多少歩きづらそうにしながらも、身動きがとれないというわけではないようだ。狙っている屋台へ、すいすいと向かっていく。

「すごいな……」

「はう～」

俺たちはそういうわけにもいかない。

っていうか、俺たちのせいで、この国の人たちが動きづらそうにしている節もある。邪魔なんだろうな……。

「なかなか食べれないよ～」

「そうだな」

俺とキヨカは、昨日食べていないものを食べようと、昨日は散策できていないエリアに向かっていた。しかし、そこは屋台外の入り口からは、奥に向かった所になるので、なかなか目的地に到着できない。

もみくちやにされながら、ゆっくり近付いている感じだ。

「はう～、トールちゃん」

「どうした」

「お腹が空いて、力が出ないよ……」

「……………俺もだ。なあ、もうこの辺で適当になにか食べないか？」

「……それはいい提案だね。でも、それは私のプライドが赦さないよ。そこで妥協しちゃったら、美味しいものを食べる資格はないよ」

なんだか偉そうに言ってるが、ただの意地だろ？

「この苦難を越えて、ようやく口にする事ができた料理は、究極の料理なんだよ」

「俺はこの辺でなにか食べようっと」

「トールちゃん！」

俺はそこまで拘ってないから、とにかく空腹を満たそうとしたら、キヨカが一喝してくる。

「なんだよ」

「トールちゃんは、ここで諦めちゃうの？」

「俺だって、それはわからなくないさ。けどな、現実問題、俺は空腹なんだよ。とにかくなにかを食べたい。できれば美味しいものもいい。けど、ここだって充分美味しいんだよ。だったら、ここでいいじゃないか」

「見事な妥協だね。確かに、ここの料理はどれも美味しいよ。けど、もっと他にも種類はあるんだよ。だったら、それを味わわないと、人生を損した事になっちゃうでしょ」

「大袈裟じゃないか？」

「食べる回数は決まってるんだよ。その限りある中で、常に最高のものを求めるのが人間じゃない。しかも、私たちは旅の途中。旅の醍醐味は、現地の美味しいものを食べ尽くす事。滞在も限られているなら、その瞬間に全力を注がないとダメだよ」

「……………」

熱い。かなりの力説だ。その情熱はどこからくるんだろう？

確かに、キヨカが言ってるのは正論なのかもしれない。

人間の三大欲求にもかなっている。

だけど、実際のところ、そこまで拘らなくてもいいんじゃないかと思う。

この辺りの屋台の料理だって、この国ならではのものだ。美味しかったし、また食べたいと思ったんだから、別にいいんじゃないか？

「……って、別に俺はそれで満足してるんだから、お前に強制される事はないんだよな」

「トールちゃんのためを思って言ってるんだよ。ここで妥協したら、絶対に後悔するよ。後で後悔しても遅いんだからね」

後で後悔って……二重表現だぞ。頭痛が痛いって感じの。けどまあ、それくらい言いたいんだらうな。

「……わかったよ。そこまで言うなら、俺だって……」

「それでいいんだよ」

「俺だって、旨いものを食べたいしな」

「でしょ？」

本当に嬉しそうに笑うんだよな。だから、勝手にできないんだよ。

「お二人とも、こちらです」

キッキさんが先導してくれているんだが、そのキッキさんが難なく進んでいってしまうので、全く追いつけないんだよな。

キッキさんについていけばいいんだらうけど、それがなかなか難しい。一瞬だけ道ができるんだけど、本当にその瞬間を逃したら、今みたいになってしまう。

むしろ、俺たちがはぐれないのが奇跡なのかもしれない。お互い、ほとんど動けていないので、なんとか離れずにすんでいるのかもしれない。

でも、普通なら人の波に流されてしまうんだらうけどな。この国の人たちは、上手く俺たちを避けているのか、逆行する事はなかった。

「ぷはぁ。すみません」

「すみません」

俺たちは、なんとかキッキさんの所にたどり着けた。ここまでで、かなりの体力を消耗した。

今食べたら、かなり美味しいと感じれるんじゃないだらうか。

「お二人が昨日来ていないのは、この辺りでしょうか」

キッキさんが両手を広げる。

この人混みの中で、そんな事ができるのか。でも、他の人たちも、それほど混雑しているとは感じていない気がする。

「キッキさん、すごいですね」

キヨカが感心するが、キッキさんはなんの事かわかっていないんだらう。首を傾げるだけだ。

「私が……ですか？」

「そうですよ。キッキさんはすごいです」

「あの……よくわからないのですが……」

突然の事に、キッキさんは戸惑っているようだ。

そりゃそうだろうな。この国では、これが当たり前なんだろう。そんな当たり前の事を当たり前にしていて、褒めてもらえる事なんて普通はない。だから、よくわからないんだろう。

「すごいですよ。こんな人がいっぱいなのに、すいすいと歩いて行っちゃうんですから」
ちょっと補足する。

「ああ、そうでしたか。ですが、それは私には……とといいますか、この国の人たちにとっては、至極当然の事なんですよ」

「それでもすごいです」

それが当然だとしても、それがすごいという事に変わりはない。

「しかし、あの荷物を持ってこなくてよかったな」

「そうだね。やっぱり、地元の話は、ちゃんと聞いておくべきだったね」

今の荷物だけでも辟易してるのに、あの大荷物を持ってこの人混みを歩くなんて、想像するだけでげんなりする。預けておいて正解だったみたいだ。

昨日はそこそこ歩けたので、今日も大丈夫だと思っていたけど、どうやら勝手な思い込みだったようだ。地元の話は、地元の人が一番わかっている。

これも、郷に入れば郷に従って事なんだろうな。

「この荷物でも動けないなんて、すごいよね……」

「この国の人全員が集まってるみたいだよな」

「そうかもね」

もう、笑うしかない。

目的の屋台まで行くのに、こんなに苦勞するなんて思ってもいなかった。

「もう疲れちゃったよ……。この辺りの屋台はまだだから、今日はもうなんでもいいかも」

「俺もそんな気分だ」

さすがのキヨカも、今日の人混みには疲れ果てたようだ。目の前のもので済まそうとしている。こんな妥協をするなんて珍しい。

でも、その気持ちもわかる。この人混みの中を、色々な屋台を物色するのは考えるだけで疲れる。

「明日は、もっと早く来ようね」

「そうだな」

早い時間なら、比較的人も少ないみたいだから、その時間を狙って、改めてこの辺を物色する事にしよう。

俺たちは、手近にあった屋台で食事を済ませた。

その後、宿に戻ると、あれだけ眠っていたにもかかわらず、すぐに眠ってしまった。

翌朝、俺たちは賑やかな声で目を覚ました。

「トールちゃん……」

「ああ、なんだか賑やかだな」

なにか祭でもしているんだろうか。でも、それらしい事を聞いていない。キッキさんだったら、そういう事を教えてくれるだろう。なにせ、ガイドをしてるんだから。

「なにかあったのかな？」

外を見ると、大勢の人が走っている。みんなが同じ方向に走っているようだ。

なにかマラソンとか……？ いや、それにしても、走っている人たちは青ざめているというか、慌てているというか……なにかから逃げている？

もし、なにかから逃げてるとしたら、俺たちが思いつくのはひとつだけだ。

「もしかして……」

「わからない。でも、そうなのかもしれない」

俺たちは、急いで着替える。お互いを気にする余裕なんてない。

「行くよ、トールちゃん」

「ああ」

今ばかりは、遅れる事はない。

昨日、荷物を返してもらっておいてよかった。

あのまま預けておく事もできたけど、やっぱり手元に置いておきたかったので、返してもらっていた。

それが正解だったのかもしれない。

俺たちは、荷物を持って、外に向かう。

フロントに向かうと、そこには誰もいなかった。

「どうしよう……」

「とにかく、宿の代金だけは置いておくか？」

宿泊代はきちんと支払っておかないとな。お世話になったし。

だけど、ここに戻ってくる事も可能だ。無人の所に置いておくのもな……。

「とにかく、今は騒ぎの原因がなにか確認しよう。宿代は、それからでも大丈夫じゃないか？」

「そうだね」

俺たちは、とにかく騒ぎの中心に向かう事にした。

宿を出ると、大勢の人が走っている。あの屋台に匹敵する数だ。だけど、屋台と違うのは、みんなが走っているという事だ。

大勢が一斉に走っているの、思うように動く事はできないだろう。

同じ方向に走っているのがまだ幸いか。これで、あちこち思い思いの方向に走っていたら、もっと混乱しているだろう。

だけど、これでも十分に危険だ。

もし転びでもしたら、無事じゃすまないだろう。

「どうしよう……」

「そうだな……」

この中を逆走する事は不可能だろう。

俺たちは、宿の入り口で立ち止まり、この状況を見守るしかできない。

「そのうち、人も少なくなると思うから、それを待つしかないよな」

「やっぱりそうだよな」

人が少なくなるのを待つしかない。いくらなんでも、これがずっと続くはずがないだろう。いつかは、人が少なくなる時がくる。

そうなった時、果たして間に合うのかわからない。それでも、身動きがとれない。

「アーちゃんにお願いします？」

「蜘蛛(アラネーオ)か……」

それはいい考えかもしれないと思ったけど、それはそれで余計な混乱を招く事になるだろう。

逃げていた先に、いきなり蜘蛛(アラネーオ)が現れたら、どうすればいいのかわからなくなり、危険な状態になるだろう。

「やめておこう。やっぱり、このまま待つのがいいと思う」

「そうだよな。私たちが余計な事をして、パニックになったら大変だもんね。それに、人が少なくなった方が、思う存分戦えるよね」

「……できれば、あまり周囲に被害がないようにしたいんだけどな……」

人もそうだけど、街に関しても被害を出したくない。

綺麗に整備された街だ。これを壊す事はしたくない。

だけど、それは難しいだろうな……。できるだけ、そういう被害が少ない場所に誘導できればいいんだけど……。

どこかないか……？

「トールちゃん、あの広場に誘えたらいいんだよな」

広場……？

「そうか。そこがあったな。あそこなら、周囲になにもないから、被害を少なくできるかもしれない」

「でしょ？ じゃあ、今のうちに作戦を立てようよ。なにもしないなんて、もったいないよ」

「よし、そうするか。ただ、いくつか考えないと」

「当然だよ。ひとつだけじゃ、すぐに意味なくなっちゃうよ」

「そうと決まれば、作戦会議だ」

「おーっ！」

なんだか、テンション上がってきた。

人が少なくなる前に、考えないと。すぐに動くぞ。

作戦は、お互いの意見がほぼ一致しているので、すんなりと決まっていく。だけど、これはこれで危険だ。

二人とも同じ側面でしか見ていない可能性がある。俺たちが見逃している事があれば、作戦は無意味になってしまう。

「これだと、順調すぎるよね」

「そうだな。不確定要素はあるとおいておいた方がいいだろうな」

「だけど、予想できないから、不確定なんだよね」

「そうなんだよな……」

どの作戦も、考え通りに進んだ時だけ有効なものだ。

もっとも、どの作戦もやっぱりキーになるのは蜘蛛(アラネーオ)だ。

俺の力は、あくまでもサポートでしかない。

「一番の不確定要素は、蟲(ベステート)がどんな大きさで、どんな能力があるかわからないって事だよな」

「そうだね。でも、その前にもっと不確定な事があるよ」

「なんだ？」

他になにがあるんだ？

「これが本当に蟲(ベステート)なのかって事だよ」

「……………」

そうか。その可能性だってあるんだ。

俺たちは、あくまでも蟲(ベステート)によるものだとして話を進めている。だけど、これが別の原因があったとしたら、俺たちがしている事は意味がなくなってしまう。

「でも、やっぱり蟲(ベステート)が原因だと思うよ」

「そういや、蜘蛛(アラネーオ)は？ 蜘蛛(アラネーオ)はなにか感じてないのか？」

「それがね……あまりわからないみたいなんだ」

「そっか……」

だとすると、これは蟲(ベステート)が関係していない可能性も出てきたわけか。

「っていうか、思い込んでたから、その可能性を考えてなかったな」

「そうだね。私もさっきまで気付かなかったよ」

「いや、気付いただけですごいと思うぞ。俺は、全くそういうのを思わなかったからな」

「もっと褒めてよ」

「ああ、偉い偉い」

棒読みだ。

「なんだか、感情がこもってない。もっと、愛情たっぷりに褒めてよ」

「はいはい」

適当にスルー。そんな事をしている場合じゃない。

そうこうしていると、人が少なくなってきた。

「行くか」

「そうだね」

荷物が多くても、なんとか逆行できるくらいにはなったので、人の波に逆らって走る。ゆっくりしているわけにはいかない。

「蟲(ベステート)じゃないかもだし、なんだろうね？」

「さあな。でも、蟲(ベステート)の可能性もあるだろ」

「そうだけど……」

とにかく、現場を見てからでも遅くない。

正体不明の危機に向かっていくのは得策じゃないけど、いざとなれば蜘蛛(アラネーオ)に協力してもらえば、逃げる事だってできるかもしれない。

走っていると、やがて人がいなくなる。そこは、役所などが並んでいる辺りだった。

少しだけ、視界が開ける。

「いったいなになが……」

と、確認するまでもなかった。目の前に、それはいた。

「トールちゃん、なに、あれ……」

「なんだ……こいつは」

それは、今まで見た事もない姿をしていた。もちろん蟲(ベステート)でもない。これがこの世界に異変をもたらした蟲(ベステート)だとは思えない。

今、俺たちの目の前にいるのは、明らかに蟲(ベステート)とは違うものだ。

大きさは象くらいだろうか。

そいつは、大きな獣のようだった。四つ足に大きな太い尻尾。その尻尾には、大きな鋏のようなものがある。

そして、なによりも異様なのは、体全体が黒い煙のようなもので覆われているという事だ。

普通の存在じゃない。

ゆらゆらと陽炎のように、体全体を黒い煙のような、霧のような、とにかくよくわからないものが覆っている。

「……これって、蟲(ベステート)じゃないよな」

「……私もそう思う」

「……俺たちで、なんとかできると思うか？」

「……わからないよ」

「……だよな」

俺たちは正義の味方じゃない。傭兵でもない。つまり、戦うのは専門じゃない。

「だけど、俺たちしかいないよな」

この国の人たちの姿はない。

自警団みたいなものはないのか。

あるとしても、これは対象外だろうな。さすがに、人外のものを相手にする組織があるとは思えない。だったら、逃げるだろう。

それもいいと思う。規格外の相手に、無謀に立ち向かうのはいい事じゃないと思う。恥ずかし

い事じゃないと思う。

正直なところ、俺だってここから逃げたい。

こんな相手に、俺たちの力が通用するとは思えない。

あくまでも蟲(ベステート)を相手にしているだけだ。こんな奇妙な生物――まあ、こいつを単純に生物とっていいのかわからないけど、とにかく生きているんだらうから生物だよな。

獣というか――RPGとかに出てくる魔獣みたいだよな。完全にファンタジーの登場キャラだ。もっとも、俺たちがしている事って、まんまファンタジーだったりするんだけど。

「やるしかないか」

ここで逃げるわけにもいかないだらう。本音は、逃げたいんだけど。

「トールちゃん、大丈夫？」

「わかんない。だけど、俺たちしかないだらう」

「そうだけど……」

「風伯の力があれば、なんとかなるかもしれないだらう」

普通の武器が通用しないかもしれないけど、俺の風伯なら通用するかもしれない。なんてったって、風で斬る事ができるんだから。

「……そうだね」

そう言って、キヨカは鞆からなにかを取り出している。

「私も、これで応援するよ」

その手にはフルートが。

「サンキュな」

最高の応援だ。

「頼むぞ」

風伯を抜いて、目の前の黒い獣を見据える。

黒い獣は、その大きな体を揺らしている。威嚇なんだらうか？ でも、特に目的があるようには思えない。ただ、暴れているだけに思える。そこは蟲(ベステート)とあまり変わらないように思える。

「キヨカ、無理だと思ったら逃げろよ」

俺は風伯を持ってるが、キヨカは無防備だ。もっとも、蜘蛛(アラネーオ)がいるから大丈夫だらうけど。

それでも心配だ。

「トールちゃんもね」

「わかってるさ」

俺だって、風伯が通用しないとすると、逃げるしかない。

黒い獣は、ゆらゆらと体から影のようなものを出している。

どうする……。どうすればいい？

ここは、先制攻撃しかないか。

「やってみるか」

とにかくやるしかない。

風伯に風を纏わせる。

それを見て、キヨカもフルートを構える。

幸いにも、黒い獣の向こうには広場がある。被害も少なくすみそうだ。

こくとキヨカが頷いたのを合図に、俺は風伯の風を放つ。

どうだ？ いけるか？

風の行方を注視する。

俺たちの攻撃は通用するのか？

「……………いけっ！」

そんな俺の気持ちが届いたのか、そんなはずはないんだけど、風は黒い獣に命中した。もっとも、黒い獣は動いていないので、当て放題だったのもある。

だけど、当たったからって、効果があるかは別問題だ。

風は、黒い獣の影を斬り裂くように命中した。

「……………どうだ？」

「……………どうかな？」

しばらく見ているが、黒い獣には特に変化がみられない。

「ダメだったのかな……」

「もう一回だ」

とにかく、攻撃してみるだけだ。

「私も協力する」

そう言って、キヨカはフルートを演奏し始める。

「いい音だな」

相変わらず、キヨカの音は気持ちいい。不思議と、風伯の風の威力も増している気がする。

「すごいな、これ……」

こんな如実に影響が出るなんて……。

もう一発、やってみるか。

キヨカの音の力を得て、威力が増した風を放つ。

ごうと音を立て、黒い獣に命中する。

勢いを増した風が、黒い獣を吹き飛ばす。

「おおっ」

思った以上の効果だ。

「すごいね……」

キヨカも演奏をやめる。

黒い獣は、どさりと音を立て、広場に落下する。

しかし、ダメージはほとんどないのか、ゆっくりと起き上がる。

「……マジか」

「無理なのかな」

キヨカの音を受けて、威力が増した攻撃でも通用しないって事か。

これ以上は無理だぞ。

「アーちゃんにお願いします？」

「いや、やめておこう」

「でも……」

俺たちの攻撃が通用しないので、蜘蛛(アラネーオ)に頼りたいのはわかる。だけど、蜘蛛(アラネーオ)を危険な目に遭わせるわけにもいかない。

蜘蛛(アラネーオ)には、本来の目的である蟲(ベステート)の封印をしてもらいたい。こんな関係ない相手に、その力を使わせる事もないだろう。

「蜘蛛(アラネーオ)には、蟲(ベステート)相手の時に活躍してもらおうぜ」

「……………そうだね」

キヨカは優しい目で、自分の左手を見る。

「もう一回してみようか」

「……いや、何度やっても同じだと思うんだ。だから、今度はちょっと変えてみる。フルート、頼むぜ」

同じように風を放っても、あいつには通用しないらしい。離れての攻撃が無理なら、直接しかないだろう。

「……………わかった」

俺が考えている事がわからなくても、俺が無茶をしようとしているのはわかってるんだろうな。

「大丈夫だって。だから、力を貸してくれ」

「怪我とかダメだからね」

「ああ」

「……………ホントだからね」

心配してくれるのは嬉しい。だけど、今はそれが重い。

だからこそ、できるだけ無茶のないように――少なくともそう見えるようにしないとな。

キヨカはゆっくりと音を奏で始める。

「これが一番だよな」

曲名は知らなくても――っていうか、だいたい、キヨカのオリジナルらしいんだけど、キヨカが演奏する曲はどれも落ち着く。

「さてと、やってやるか」

風伯に風を纏わせ、黒い獣との距離をはかる。

相手はほとんど動かないので、狙いはつけやすい。だけど、それが逆に不気味だ。

動かないと思っていた相手が、急に反撃してくる事ほど不気味なものはない。

それは、剣道の試合も同じだった。

勝てると思ったり、余裕だと思った時は、自分が油断している証拠だ。そういう時に、呆気なく負けてしまう。

その度に、じいさんにボコボコにされたっけ。

そんな暴力的指導のお蔭で、そういう事は少なくなった。もっとも、やっぱり全くという事はなく、じいさんにボコボコにされる回数が減っただけだった。

それを思い出すと、なんだか微笑ましくなってくる。

過去の失敗を笑って話せるっていいな。

――って、今はそういう場合じゃないか。

だけど、これで少しだけ落ち着いた。

目の前の相手に集中できる。

いつ動くかもわからないので油断しない。そうしつつ、ゆっくり間合いを詰めていく。

じりじりと近付き、相手の動向を窺う。

風をゆっくりと感じて――

一気に接近する。

「くらえっ！」

ほぼゼロ距離で、風伯の風を放つ。

「……………ん？」

しかし、感触がない。

本当に影を相手にしているみたいだ。実体がないのか、こいつは。

だけど、黒い獣は後方に吹っ飛ぶ。

どうなってんだ？

さっきもそうだったけど、攻撃を受ければ飛んでいる。だけど、感触はない。

実体がないというわけでもないのか。

「もう一度、試してみるか」

飛んでいった黒い獣が起き上がる前に、もう一度突っ込んでいく。

その間に、風伯に風を纏わせ、ゼロ距離で今度は風を放たず、そのまま斬りつける。

風の刃が、影を斬り裂く。

「やっぱりない」

風伯の風で、影は確かに斬れている。だけど、やっぱり感触はない。

斬れた影も、一度は散るのだが、すぐに元に戻ってしまう。

「これじゃ、キリがないじゃないか」

実体のない相手に対して、どう闘えばいいんだよ。こんなの、打つ手なしじゃないか。

「トールちゃん、危ない」

キヨカの声で顔を上げると、目の前に黒い獣の姿があった。

「っ！」

やばい、と思った瞬間、既に俺は宙を舞っていた。

「トールちゃんっ！」

キヨカの叫び声だけが聞こえる。

だけど、その声はとてもゆっくりで、まるでスロー再生しているみたいだった。

星空が綺麗だな……。

なんだか、そんな事しか考えられない。不思議なものだな。

星空を堪能している間は、永遠にも思われたけど、実際は一瞬だったんだろう。

ドザッと、地面に叩きつけられた。

「がはっ」

肺から空気が吐き出されて、呼吸ができなくなる。

なにが起こったんだ？

……いや、考えるまでもないのか。俺は攻撃を受けたんだ。

やっぱり、油断してたんだろうな。黒い獣の動きを見ていなかった。

その隙に、相手の攻撃を受けた。

それだけの事だ。

そして、それが全てだ。

「……トールちゃん」

キヨカが駆け寄ってくるのが音でわかる。

「大丈夫？ ねえ、トールちゃん」

駆け寄ってきたキヨカに、頭を抱えられ、キヨカの膝に乗せられる。

目の前には、泣きそうな——いや、もう泣いてるか——キヨカの顔がある。

「トールちゃん、大丈夫？」

視界がぼんやりしてくる。

ぼたぼたと、冷たいものが頬を伝う。

「トールちゃん、トールちゃん」

「……………大丈夫だって」

吐き出すように言う。

「莫迦なんだから。ちゃんと前を見てないとダメでしょ。心配させないって、無茶しないって…

…でも、油断しちゃダメだよ」

キヨカは泣いていた。泣きながら、必死に言葉を紡ぐ。

「もう……本当に莫迦なんだから……………」

キヨカが自分の額を、俺のそれに重ねる。

「ここからは、アーちゃんにお願いするからね」

そう言うなり、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

「アーちゃん、しばらくお願い」

「了承した、

どうやら、蜘蛛(アラネーオ)は黒い獣に向かっているようだ。

でも、相手は蟲(ベステート)じゃないだろ。

そんな相手に、蜘蛛(アラネーオ)はどこまで闘えるんだ？ もっとも、俺よりは強いんだけど。

「じっとしてて」

俺も闘おうと、ゆっくりと体を起こそうとして、キヨカに押さえつけられる。

心の歌を奏でて 一理想の国一 ㊤

<http://p.booklog.jp/book/88165>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88165>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88165>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ